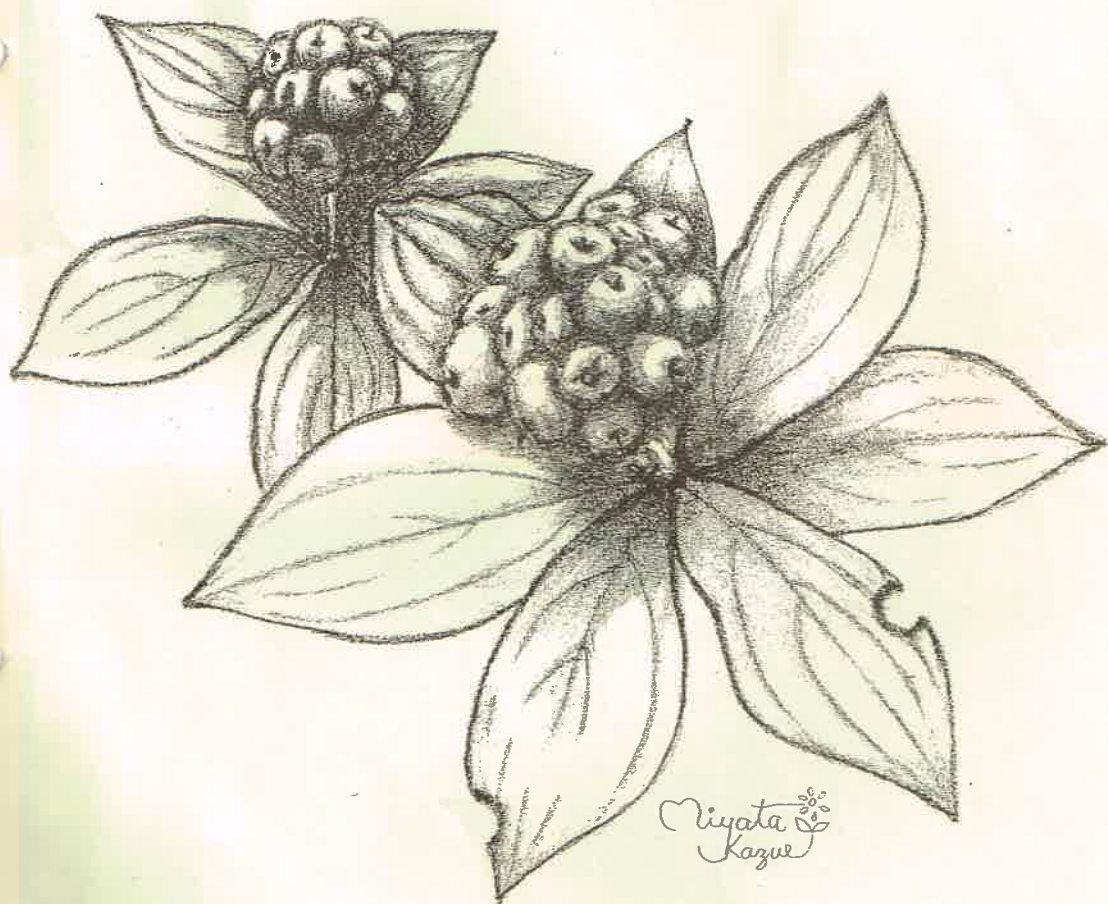


五葉アザミ



2008年秋季号 86

北海道ボランティア・レンジャー協議会

平成20年6月27～28日 東大演習林・研修



石狩山地の伏流水が流れ出る西達布川の源流。雪解け水や雨水は数十年もの歳月を経て浄化され安定した水量で湧水となっている。



択伐業では巨木を植栽しないで、選木伐採によって収穫する。どの木を伐採すればその林分が持続的木材生産が可能かを基本として選木伐採する。〈選木の基本と方法を習う〉

目 次

- ・写真 東大演習林での研修 そして目次
- ・木曾駒ヶ岳登山記 会長 田村 允郎
- 1、特集 富良野 東大演習林での研修
 - ・東大演習林—林分施業法の話聞いて— 札幌市 原田 和彦
 - ・東大演習林研修会に参加して 札幌市 山田 千晶
 - ・「アポイ・富良野東大演習林」研修に参加して 札幌市 清水 邦子
 - ・東大演習林研修会に参加して 札幌市 香島満也、由美子
 - ・林分施業法が息づく東大演習林・樹海 北広島市 佐藤 清一
 - ・補章 ドロ亀さん「林分施業法」をエゾマツに教えられる！
- 2、自然観察会、自然保護などに関して
 - ・秋の花でにぎわう森を歩こう <観察会の名前>札幌市 福地 順一
 - ・野を歩き自然に接する楽しみ 札幌市 宮腰幸三郎
 - ・むかわ研修会に参加して 石狩市 畑中 悠二
 - ・コケを訪ねて・鶴川海浜植物観察会に参加して 札幌市 吉田 正徳
 - ・小樽周辺登山道の案内標識板設置について 小樽市 大川 良祐
 - ・スギナとツクシのこと 苫小牧市 谷口勇五郎
- 3、紀行・研究文
 - ・ペリパトス吉野川と四万十川 札幌市 成田 伸一
- 4、<猪師 勉氏を偲んで> 会長 田村 允郎
- 5、連載
 - ・The 地球温暖化（4）人類の英知を結集して 七飯町 岡村 敏夫
 - ・<日高より発信> エンレイソウに思う 平取町 川村 桂介
 - ・いい案内人になりたい（4） 事務局長 春日 順雄
 - ・J8サミットとハネカクシ 苫小牧市 谷口勇五郎
- 6、役員会、育成研修会、支部報告、観察会案内など
 - ・第二回役員会
 - ・平成20年度ボランティア・レンジャー育成研修会 広報部 内山恭子
 - ・オホーツク支部秋季研修会 遠軽町 小栗 法韶
 - ・自然観察会の予定／ NOWから 会長 田村 允郎
 - ・メーリングリストに参加のお願い
 - ・忘年会の案内
 - ・岩手山（いわてさん）-2038, 2 恵庭市 小林英世 / “編集後記”

木曾駒ヶ岳登山記

—聖職の碑を訪ねて—

会長 田村 允 郁

ゴンドラから降りると、涼気が体を覆います。ロープウェイは一気に標高差1000mを10分ほどでかけ上ったせいでしょう。千畳敷が目の前に広がり、その奥にひととき高い岩峰の宝剣岳が聳えていて圧倒される景色が広がっていました。

中央アルプスの木曾駒ヶ岳に登るため訪れたのは今年9月の中旬でした。雨の東京新宿から中央線を乗り継いでいくうちに空も次第に明るくなり、駒ヶ根駅に下り立つと青空が広がっていました。駅前からバスに乗換え、途中ロープウェイに乗り千畳敷に着いたのは昼を少し回った時間でした。

木曾駒ヶ岳に登ろうと思った動機は二つありました。一つは、日本百名山を制覇できなくとも、北アルプス、南アルプス、中央アルプスの幾つかを登ってみたいということでした。二つには、若い頃、新田次郎の小説を愛読していて、その中のひとつ「聖職の碑」にいたく感動しいつかこの小説の舞台である木曾駒ヶ岳に登ろうとの思いがあったからです。

この木曾駒ヶ岳について、日本百名山の著者、深田久弥は書き出しを次のように記しています。

同じ信州の木曾谷と伊那谷の間を仕切って、縦々と連なった山脈、普通これを中央アルプスと呼んでいる。その主稜は、北の茶臼山から南の越百山までの長い間、二千五百メートル以下に下ることはない。

その中央アルプスの最高峰が2956mの木曾駒ヶ岳なのです。

一日目の行程は午後からの行動なので千畳敷カールから極楽平と宝剣岳を経由して宝剣山荘までとしました。足慣らしを兼ね、ゆっくりと極楽平まで登りました。極楽平から下を覗く風景を堪能しながら、岩場の宝剣岳へ向かいます。ガイドブックには「不慣れな人は転落の危険あり」とありましたが、確かに切り立った痩せ尾根です。鎖場が続く岩場に肝を冷やします。「三点支持、三点支持」と心に呪文をかけながらようやく宝剣岳の頂につきました。反対側から登ってきた3人のパーティーで狭い頂上はいっぱいです。周囲の眺望を堪能して、今日の宿泊場所である宝剣山荘に下ります。下りの鎖場でも緊張を強いられながらも一日目の行程を無事終わりました。

30人ほどの宿泊者に混じって夕食をとりますが、周り人たちは私と同年輩の風貌が目立ちます。横浜に住むというテーブルの向かいの人と1缶500円也のビールを飲みながら北海道の山の自慢話をしたのです。

どこの山小屋でも朝の早いのは通例です。周りの声で目をさました。4時を少し回った時刻です。今日も素晴らしい天気になりそうです。ご来光を仰ぎながら南アルプスの山の連なりを目で追うとそのほぼ真ん中の奥に富士山が端正な姿を見せています。西の角には雲海に浮かぶ御嶽山が望めます。

二日目の行動は木曾駒ヶ岳に登りその後馬の背を下り遭難碑から引き返す行程です。

駒ヶ岳の頂上で周囲の景色をたのしみ、馬の背コースを下っていきました。1時間ちょっとで遭難碑につきました。遭難碑には次のような文が刻まれています。

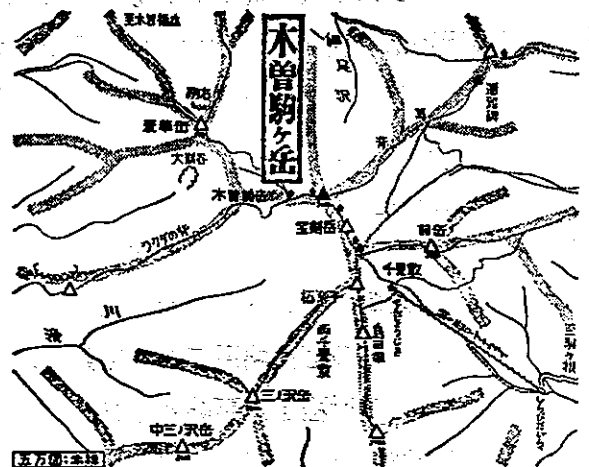
「大正7年8月26日 中箕輪尋常高等小学校長赤羽長重君は修学旅行のため児童を引率して登山し、翌日27日暴風雨に遭って終に死す」

中箕輪尋常高等小学では学校行事として木曾駒ヶ岳登山に総勢37名で出かけます。あまりよくない天候の中、山頂付近の伊那小屋で一泊の計画でした。稜線に出ると暴風雨になり、宿泊予定の小屋は半壊状態でした。実はその時小笠原海上で発達した台風が猛烈な勢いで東日本を通過中なのでした。仮小屋を設営しビバークを試みますが、生徒の疲労凍死をきっかけに一行はパニックになりちりじりに下山をはじめます。その結果、生徒9名教師2名が死ぬ遭難事故となったのです。

記録文学小説「聖職の碑」の著者 新田次郎はこの事故に強い興味を抱き、現地を訪れ登山コースを歩いたり資料を収集したりします。さらに生存者や遭難者の遺族から当時の状況を聴取してこの小説を書き上げています。

晴れ渡った秋空に建つ遭難碑のもとで、しばし当時の状況を想像していました。

ゆっくりと復路を戻り、氷河地形の千畳敷カールを下っていきました。花ごう岩のすきまのイワツメクサが可憐な白い花をつけています。どんどん下がっていくとコバイケイソウの花枯れが群立しています。コケモモの赤い実に混じりドライフラワー状のヒメウスユキソウ、また秋の花オヤマリンドウの姿もあります。せわしげに高山植物の種子を探す日本固有種のカヤクグリの姿を横目に今回の山行は終わりをづけました。東京に戻るJR中央線の特急電車の車窓から見える棚田の畔のあちこちに赤い彼岸花が背をすっとのばしていました。



東大演習林研修、一林分施行法の話聞いてー

札幌市 原田 和彦

東大演習林研修で、林長である官本先生から林分施業法の話聞いた。森林の管理を、全エリア様に行うのではなく、エリア毎に、夫々のエリアの状態に応じたやりかたで管理していくという。

択伐林分では、成長見合いで、材積の増加分を伐採していく。これを15年サイクル、20年サイクルで行うことで、より健全な森に仕立てていく。一般の人工林と異なる点は、針葉樹だけではなく、広葉樹も交えて針広混交林として管理していく点である。

伐採する木をどうやって選ぶか。森全体として活性化し、一本いっぽんの木が、夫々生き活きと成長していけるよう、いじけてしまった木や、周囲の木を不健全な状態にしている木などを選んで伐採していく。

森は、針葉樹と広葉樹とが交じり合っていて、一見原生林にも見えるが、実際には、思いっきり手が入っているという。

世の自然保護の考え方の中に、「何も足さない、何も引かない。」という、洋酒のコマーシャルのように、自然には一切手をつけるべきでないという、完全放置主義の考え方があって、それが、あたかも唯一絶対の正解であるかのように、声高に叫ぶ人もいる。本当にそうなのか、林分施業法の話聞いて、少し考えさせられた。

完全放置型自然保護の考え方では、森の中であって欲しい植物の種や苗を植えるのはご法度であり、植えられた高山植物が抜き取られた例もある。元々そこには無かった植物だから、というのがその理由なのだが、300年、500年というロングスパンでも、本当に無かったと立証できるものなのだろうか。

新しい種を入れれば生態系が崩れてしまうという議論もある。しかし、帰化植物の増加に例を見るまでもなく、人間の存在そのものが生態系を大きく変えてきている。

自然を破壊し、生態系を大きく変えてきた人間が、自然に対して何も手をかけないということで、その責任がとれるのか。タンチョウやコウノトリの保護活動やアライグマ、ウチダザリガニ、ブラックバスなどの駆除活動をどう考えるのか。

エゾコウゾリナの種子苗を植えて開花させた、アポイ岳再生委員会の試みに対しても、様々な意見があると聞く。

エゾコウゾリナは、元々アポイ岳の固有種だから、DNAの問題はないと言えるが、異なるDNAを持ち込むのは問題、という議論がある。しかし、自然界では、花たちが自家受粉を避ける様々な仕組みを工夫して進化してきている。それは、出来るだけ違ったDNAを取り込もうとするものであった筈である。その辺をどう考えるのか。

手をかけるといっても、やたらと何でも植えればいいというものでもないことは、林分施業法の話からもわかる。ただ、完全放置型が自然保護の唯一絶対のものという議論も正しいとは思えない。

自然保護のあり方、考え方や手法など、一方的に決め付けるのではなく、いろいろ意見を出し合い、知恵を出し合っていくことが大事なのではないか。東大演習林研修で林分施業法の話聞いて、そんなことを考えさせられた。

東大演習林研修会に参加して

札幌市手稲区 山田 千晶

本来は森の案内人・森を愛し活躍されている人のための研修会に、たまたま夫が最近ボランティア・レンジャーの仲間に入れて貰えた事が縁で「家族の人までそんなに来たいの～マーイイカ」との事務局の方の寛大な御目溢しのお陰と、私の心臓の強さで憧れの演習林へオマケ参加させていただきました。友人知人に東大演習林へ歩きに行くの！！と話しても「え～っ、東大？東大とアンタとどういう風に繋げて考えればいいの・・・なぜ？判らない。東大 否 大学どころか幼稚園も出ていない貴女が??？」と説明が大変でした。大部分の道民にとって東大演習林は確かに未知の敷居の高いところですよのね。

ハイレベル集団に紛れ込んでの2日間、幼児並の動・植物知識しか持ち合わせていない私でも、宮田さんによるネイチャーゲームと太陽の里散策ガイドに始まり・美味しい富良野の野菜や肉のバーベキューで夜更けまで懇親会・翌日の宮本先生の講義・先生自から隘路を生徒満載のバスを運転されながらの演習林内ガイド（宮本先生のオールマイティ振りには驚きました。東大の学者さんが私達の運転手までして下さるとは・・・夢にも思いませんでした）・大麓山登り・野生のランが小さくてなんとも不思議で複雑なかたちの花を咲かせてた事・隔離できているから守られた清く凛と冷たい湧水池見学（池の植物も本当に清々しい緑で 見せていただき幸せです）・ちょっぴり植樹と枝払い（枝打ちは4・5回目なのでもっと沢山やって見たかった）・生まれて初めて見た土に生えてるアイヌネギ（八百屋さんで見かける物とは大違い。葉が巨大で蕾もありました。ねぎの傍を歩くとアイヌネギの匂いが漂ってきました）など次から次へのプログラムを私なりに存分に楽しませていただきました。それもこれも宮本先生・宮田さん・南部先生・会長さんをはじめ会員の皆さんのご苦勞の上に成り立っている中身の濃い素敵な研修会でした。

以前3年ほど十勝の新得町に住んだことがあり、狩勝峠から眼下に深くどこまでも続く樹木の大海原を見たことがありました。今思うとそれが東大演習林だったのですね。そのとき「日本は狭くてどんどん自然が破壊されしまったと言われるけれど、こんな凄い樹の海があるなら、まだ日本も捨てたものじゃない」と思った事を覚えております。これからも100年200年と健康な森林を北海道各地に育て子孫に受け継ぎたいものです。そのためには森林ボランティア・レンジャーの皆さんの活動でもっと住民を巻き込んでいかなければいけないのでしょうか。自分が森歩きを楽しむだけではなく、森と人の関わりの大切さを知ることから私は始めなければならない人間ですが、研修会に参加させていただいてからというもの新聞やテレビで森・樹・山と云う文字や言葉に随分反応する様になりました。オマケの参加を許し受け入れてくださったボラレンの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

「アポイ岳・富良野東大演習林」研修に参加して

清水 邦子

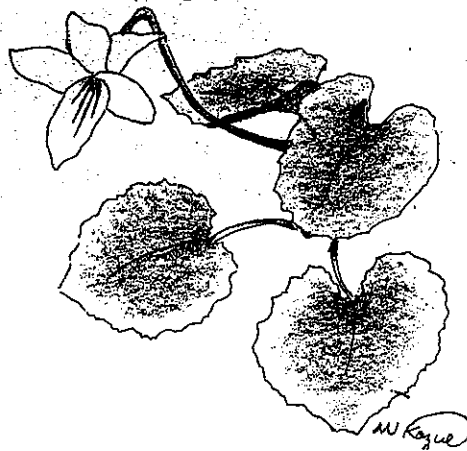
昨年、野幌森林公園ふれあい交流館でのボランティア・レンジャー育成研修会に参加して入会したばかりです。ボランティア・レンジャー（自然解説員）のネームプレートをいただきましたが未だに包装しているビニールを開けることが出来ずにいます。

子育てが終わって、やっと土、日に家を空けてもクレームが出ないようになりやってみたかった事、興味があることがいっぱい忙しい時間を過ごしています。そんな中で自然の中でゆったりと過ごし「あっ」「ふうーん」という驚きが楽しく研修会に参加し小さな驚きがどんどんたまってきています。

今回、アポイ岳・富良野東大演習林研修では、自然の中で学ぶことがより一層楽しく感じられた研修会でした。アポイ岳では、海岸線の景色の素晴らしさに、また、岩にはりついて咲いている花々にも感激しました。富良野ではジンギスカンと共に富良野の美味しい野菜をたっぷり食べ、翌朝の朝の散歩で倒木更新を見たことや、宮本先生の素早い「枝打ち」に驚いたり。初めての参加でしたがあたたかい会の雰囲気の中で楽しみました。

自然の中での不思議さ、草花が光を受けるための葉の構造、種を飛ばすための工夫された構造を見て、森の中で人の生き方と重ね合わせたり、人間の生活と自然のかかわりを知り楽しんでいきます。今まで自然を観察することがなかったことを感じるこの頃です。

昨年のボランティア・レンジャー育成会の時、配布された資料を見かえしてどう学んでいったらいいのかを参考にして感じたこと、草木花の名前を書き記しています。でも、なかなか覚えられずいます。時間をかけて研修会・観察会にできるだけ参加し「自然を観察する」を学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



大葉ふ
(ウスバズミ)

東大演習林研修会に参加して (6月27日～28日)

札幌市 香島 満也、由美子

麓郷、太陽の丘公園で富良野の宮田さんによる案内ネイチャーゲームにタカ、ネズミ、バッタに別れた参加者が、まき散らかした缶のプルトップを草に見立て拾い、バッタはネズミにつかまり、タカに食べられ、農薬の入った物を食べている事を意識させるネイチャーゲームでした。研修部長の小林さんは、海バージョンのプランクトン編もあると説明されました。

翌朝食前、宿舍の窓から蝶が樹に群れていたのので寄って見ると黒すじ蝶が沢山羽化しナナカマドの葉がみすばらしくなって蛹が残っておりました。初体験でワクワクしました。

さて今日は、木を見て森を見る研修です。宮本先生の運転するマイクロバスに乗って、演習林の中から、鹿やエゾライチョウ、ウサギが見られました。

先ず大麓山に 1000m程登山し熱心に花や木を観察する参加者の姿に懐かしく思い名前が飛びかいました。頂上にはコケモモが一面に咲いて満足でした。

昼食後は 1981 年の 15 号台風で、11 年間の伐材量の倒木があり、植林です。参加者も、アカエゾマツとトドマツを 100 本植えましたし、下枝を落とす作業にも参加しました。長い間、森を育てる為には、林の中のどの木を、切るかを研究員の人に、その理由を、説明させて決めるという丁寧な、宮本先生の講義がありました。美しい湧水の泉で手を洗い、倒木更新や、太いシナの木を見残して 5 時に、研修センターに着きました。

旭川の人や役員の方々に、お世話をかけまして遠距離運転は大変でしたが、自然に親しませて戴きました。



林分施業法が息づく東大演習林・樹海

北広島市 佐藤 清一

この演習林での研修は今年で3回目であるが、いつも多くのことを学ばせてもらい嬉しく思っている。一回目のとき、宮本先生からいただいた演習林の案内書に「林分施業法」の六原則が書かれていたが、よくわからなかった。今回の研修会には、ぜひこの理論を学んで行かなければならないと思っていた。

昨年のわが機関誌「エゾマツ」の秋季号に、会長の田村さんがよく整理して書かれていたし、北大の生協で高橋延清『どろ亀さん、最後のはなし』（新思索社）を買って求めることができ、やや理解できたように思っていた。

今回の研修会（6月28日）の朝に、ウダイカンバの木目の美しいセミナーハウスの2階で、宮本先生の「林分施業法」の講義を聞くことが出来た。さらに、午後からは天然林が繁る施業現場で説明を受け、理解が深まったように思う。

そこで、私の理解できた狭い範囲になってしまうが、それを記してみる。

森林は、一般的には原生林、天然林、そして人工林に分類されている。原生林はとても貴重なもので（この演習林では0.2%位）手つかずに保存するのが望ましい。それに対して人工林は一定の役割をもっているが、生態系を壊してしまう恐れもある。そこで、「天然林」の育成、管理が最も重要な課題となる。天然林も樹木の種類や成長状況などによって異なるので、その特性に応じて三つの小さな単位（林分）、すなわち「択伐林分」「補植林分」「皆伐林分」に分けて育成、管理することが必要になってくる。三つの型に分けて施業すること自身すばらしい発想である。

一番目の「択伐林分」は、衰退木や病虫害などにおかされた樹木などを伐（き）って良木の成長を促すことである。そのことは稚苗の成長を助け次世代につなげていくことにもなる。この方法では、植樹などはほとんど必要なく、森の生命の循環に従い、それを補助するだけである。宮本先生の説明によれば、どの木を伐るかは大の研究生や職員の調査をもとに、皆で話し合っで決めているそうである。これまでの林業では良木のみを伐採してきたが、演習林では逆に良木を残す取り組みをしているのである。ここには大きな発想の転換がある。単に経済性を求めるだけでなく、自然の豊かな循環を生かしながら経済的価値をも追求していくことにある。

二番目の「補植林分」は、次世代を担う稚樹が足りないが、それを植樹などで補えば将来的に択伐林分になっていく可能性をもっている。

三番目の「皆伐林分」は、窪地や風水害の多いところでは、自然のままでは更新ができないので皆伐して植樹することが必要になっている。

三つの林分にわけそれに応じた施業がおこなわれるが、あくまで天然林の育てる「択伐林分」の育成が中心である。天然林の育成は、樹木の生産性という経済的価値にもつながるが、今日課題となっているCO₂の吸収、生物多様性、遺伝子の保存など生態系としても重要な役割を担っている。

東大演習林での研修では、大麓山登山をはじめ倒木更新、「択伐施業」の現場などを観察し、さらに「補植林分」での作業と思われるトドマツ、アカエゾマツなどを植樹し、場所を移動して枝打ちなどを通して「林分施業」が息づいていることが実感することができた。

先日の「朝日新聞」の夕刊に、「天然林の伐採、実態は」という見出しで、大雪山国立公園の糠平湖北側付近では広い範囲のわたって皆伐され、山肌がむき出しにされ、表土もはがされている様子が報道されていた。台風の被害を受けたので皆伐したと説明されていたようである。ある程度の皆伐は避けられないとしても、次世代の稚苗を育て、必要な遺伝子を保存していくためにも表土をはがして砂利を散乱させるようなことをすべきでない。あまりにもひどい乱伐なので研究者たちは「天然林を救う会」を組織したり、10月には日弁連の自然保護部会の人たちが視察することになっているようである。

大雪山国立公園に隣接する富良野の東大演習林では、天然林を育て豊かな森林生態系をつくりだす実践が成果をあげている現状を少しは学んで欲しいものである。

〇〇 太陽の里、東大演習林での当日の研修、行動

6月27日 (金)

- 13:30 太陽の里、集合 その後、ネーチャゲーム
- 14:30 宮田さんのガイドで「沢コース」を観察、研修
- 18:00 セミナーハウスで懇親会 ホルモン、野菜など美味しくもりあがる

6月28日 (土)

- 8:00 朝食後、セミナーハウスで宮本先生の「林分施業法」の講義
- 9:00 宮本先生の運転するマイクロバスで大麓山登山へ
- 12:30 作業現場まで下山し、昼食
- 14:00 一度セミナーハウスの方にもどり、その後、天然林の育成現場を視察
宮本先生の「択伐施業」の説明を受ける。林分が改良されるために伐採する木を一本一本決めている。
- 15:40 トドマツ、アカエゾマツの植樹 (100本)
- 16:10 枝打ち作業 (神社山周囲で)
- 17:00 セミナーハウスに集合、解散

*なお、時間帯についてはアバウトになっているところがあ
ってみません

<東大演習林研修> 補章

ドロ亀さん「林分施業法」をエゾマツに教えられる！

□□ ドロ亀さん(高橋延清)は長い年月にわたって試行錯誤を重ねながら「林分施業法」を見つけ出し、それを実践にうつし富良野の美しい樹海をつくり出している。ドロ亀さんはそうした理論をエゾマツに教えてもらったと擬人化して書いている。

「……15年もやって山の取り扱いが、まったくわからなくなってしまった。ドロ亀は頭を抱えていた。落葉を踏んでいつもの林を歩いていると「ドロ亀君」と声をかけられた。まえに雨宿りをしたことがある、大木のエゾマツさんである。おろかなドロ亀をあわれに思うてか、いろいろなことを教えてくれた。……そのしゅんかん、ドロ亀は森林のはたらきと発展方向をつかんだのである。このことをドロ亀は仲間たちに話した。そうだ。そのとおりかもしれん。皆で力を合わせてやってみることにした。それから見ちがえるように森林は力強く、美しく発展していった。そして、人びとを驚かしたのである」(P303)

□□ ドロ亀さんの自然観、自然哲学

「森林は、いろいろな生物と土地および大気の」統一体であり、その構成分子間で、絶えず相互作用を行なって、一つの生活体系(生態系)として動いている有機体(生き物)である。これは、恒続思想であるドイツのメラーの森林に対する考え方である。私もまた同じ考え方である。」(P308)



今日ではこの自然観は生物多様性であり、ドイツのメラーの恒続思想は「サステナビリティ」(持続可能性)としていわれる内容をもっている。たしかに、メラーの考え方は画期的な考え方といわれているが、アカマツの森林を対象した理論のようで今日から見ると一定の限界を持っているようでもある。

この「林業施業法」は1958年頃より東大演習林で実施を始め、その間、いろいろと論文を書きながら1971年発行の著書『林分施業法—その考えと実際』にまとめられている。今日、地球規模での自然破壊がいわれるなかで先見的な考え方である。

ここでの引用は高橋延清『どろ亀さん、最後のはなし』… 夢をはぐくむ富良野の森… (新思索社) そのなかの箕輪光博さんの論文から再引用。

<観察会の名前> 秋の花でにぎわう森を歩こう (9月11日)

野幌森林公園の自然観察会に参加して

札幌市 福地 順一

爽やかな秋晴れのもと、集う者約80人。班編成として10班ほどにもなるうか。その第3班に加わって、午前10時半、いざ出発。「開拓の村」から小暗い沢へと細い道を下り、そしてゆるやかな登り道を上って「百年記念塔」へ。

辺りを見渡すと、草木は風と日の光を受け、正に白秋。年古りた樹が葉裏をひるがえし、秋の風に鳴っている。

その疎林を抜け、アワダチソウで黄ばんだ丘の小径をたどれば、「自然ふれあい交流館」に。昼食。

午後は原始林の続く平坦な道を歩く。視界が明るくなると、端正な「瑞穂の池」が見えてくる。そこからまた涼しげな道を通って行くと、いつしか「開拓の村」へと戻っている。

到着は午後の2時半。一周6、5キロ、4時間ほどの行程となる。コースは変化に富み歩いているうちに、雑草・雑木の名前や特徴も分かって来、不思議と興は尽きない。

先導は熊野美子先生。しんがりも観察指導員。

講師の説明で私がメモした草木の種類は80種ほど。記入もれもあるとして、約百種ほど学習したことになろう。それも単に名前だけでなく、その和名の由来、特徴、性質、類似種、用途—いろいろと多岐にわたる。

チドメ草、クツキ虫、イヌタデ、ネコジャラシ。顔につける、胸に飾る、赤マンマにしたり、猫をじゃらしたり、よく子どもの頃遊んだっけ。

特に印象に残ったのは、オペラグラスのヤブハギ、キセルのガンクビに似たヤブタバコ、胃に似たトリカブト、清楚可憐なアケボノシ

➤右上につづく

ユスラン、軍陣の采配に見立てたサイハイラン、いかにもアイヌ語らしいサビタ。それぞれユニークな特徴をもち、忘れられない。

こんなこともあった。調子もんの私が「あの木何の木?」、誰かが「ホオの木」、すかさず皆が「ホー」、愉快だった。

北大のポプラも倒れたあの16号台風では、野幌自然林も倒木が多かったという。その復元のことで話題に。自然のままに任せ回復を待つ、いや植林して早く復活させるべきだなどなど。

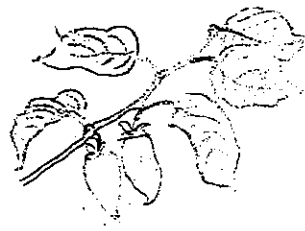
帰化植物も自然の一環それもよしではないか、いや刈りとして固有の自然形態を残すべきだなどなど。

思うに今のわが国にとってもっとも大切な問題は食糧、エネルギー、環境。

環境問題で言えば、大きく捉えて地球環境。身近なことでは、野幌森林公園の自然環境をどう後世に伝えていくかであろう。そんなことを考え、自然に関心をもち、自然に学ぶことは大いに結構なことだ。

天高き快晴のもと、森林浴とウォーキングを兼ねての自然観察会、実に楽しかった。

企画してくれた主催者側、講師の先生方に感謝、感謝である。ありがとうございました。



野を歩き自然に接する楽しみ

宮腰幸三郎

楽しみにしていた7回目の自然散策、観察会の朝、気温は約20度、うす曇の絶好のアウトドア日和で、おにぎりとドリンクをリュックに入れ妻とそそくさと家を出発しました。

学校を退職し、専門学校の再就職も辞した今年の春、これまでの趣味に加え、アウトドアで何か年齢や体力にも適したものはないものかと思案していたところ、ある大学が主催する市民セミナーからの案内を受け、この4月に初めて自然観察会に参加したことがきっかけとなり、その後、色々な会のお世話になりました。

まず、驚いたことは、どの会でも、講師の先生の指導と参加者の熱心な取り組みでした。そして、長い実践と経験から滲み出た真摯な姿勢に感服しました。多くのボランティアの方々が、長く積み重ねてきた経験と知識を広く伝えることに大きな喜びを覚えていることや、何かを確認し、向き合っている熱心な参加者が多いことがとても私にとって刺激となり、勉強になりました。

野道を歩きながら、子どもどころ野山や道端で何気なく見ていた多くの草花や木々を改めて確認し、自然の大きな力や不思議さを知り、緑や澄んだ空気、やわらかい土の感触に予想を超えた素晴らしい経験となったことに深く感謝したいと思っています。また、歩くことの少なくなった今日の生活の中で、しっかりと歩くことの意義と大切さを知り、快い汗を流すことも大きな魅力となりました。

わずかな経験で感じたことは、とかく中高年者を対象にしたこれらのイベントのように思われますが、内容に若干の工夫を加え、より多くの小中学生の子ども達が、もっと自然に接し、自然を身近にした生活を取り戻すことへの力になれば、素晴らしいと思いました。

※ 参加した観察会 → 芸術の森観察会 (7月20日)

住所 氏名 → 中央区北4条西20丁目2-12-601 宮腰幸三郎

むかわ研修会に参加して

H20年8月

石狩市 畑中 悠二

私は当会員になって2年目、樹木、特に巨木を見ることがや春、秋の山菜採りが大好きで気軽に会員になりました。

しかし、会員の方々はとても研究熱心、植物名やその語源もよく知っていることに感心させられました。

今回むかわ自然観察会では、当日は下見観察会のあと地元会員を含め懇親会で、普段顔と名前が一致していませんでしたが、自己紹介や余興もあり気持ちがほぐれ、少しは分かりとても良かったと思う。

翌日、一般市民参加者がいなかったので、観察会は会員だけで行われましたが、普段、見慣れたオオマチヨイグサ、ツリガネニンジン、ハマオミナエシ等、草花は普段、見なれているにも拘らず、名前がわからず、もっぱら教わるばかりでした。

これからは、問題意識を持ちながら、自分の身近で見たことのある植物から少しずつ覚えて行こうかなと思いました。

私は、趣味が多く、スキー、卓球、家庭菜園、山菜採りなどをして遊んでいますが、最近、趣味と地球温暖化問題が深くかかわって、私の趣味にも大きな影響が出ているような気がしています。

・スキー：最近の雪の少なさ（スキー場の早期閉鎖）、大寒時期に余り寒くない
・家庭菜園：4月から高温になり5、6月は低温で地熱が上がらず種の発芽が悪い
7、8、9月は降雨少なく野菜の成長が遅かった
・山菜：5月にひょうが降り ウド、フキなどが茶色に枯れビックリしました。

近年、地球規模で洪水や大型台風、ハリケーンの襲来等の異常気象にみまわれ多大な被害を出たことやオゾン層の破壊、過度な森林の伐採により野生生物が減っています。また、今年7月、洞爺湖サミットが環境テーマとして開催され、温暖化対策の必要性が待たなしの状況にあると言われていています。

先日、石狩図書館で見た書物ですが、持続可能な社会づくりとして

- ・ 循環型社会（リサイクル）：環境にやさしいものを大切にする社会作り
- ・ 自然と共存：自然と人間が仲良く共にくらす
- ・ 参加：役割分担して、みんなで行動する
- ・ 国際的な取り組み：世界中の国が協力して行動する

など地球環境問題はグローバルな視点で自然環境に取り組み、複雑多岐・多国に絡み合う大きな問題であり、これをどう実現していくか21世紀の最大の課題ではないかと思われまます。

コケを訪ねて

——鶴川の海浜植物観察会に参加して——

札幌市 吉田 正徳

今回は本題の「コケを訪ねて」からそれてしまいました。つい鶴川のことを書いてみたくなったのです。8月の末、鶴川で海浜植物の観察会がありました。海浜の植物にお目にかかれるのは何年振りかのことです。

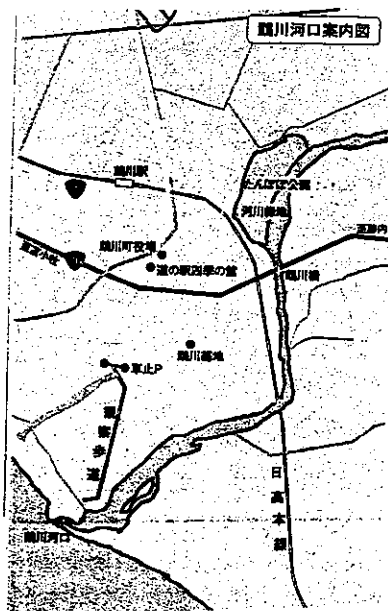
鶴川の河口には野鳥たちの住みかになる大切な干潟があります。この干潟も20年間の間にほとんどが失われてしまったそうです。ここは、シギ、チドリ類の中継地となっており、また、カモメやカモ類のほかにはハヤブサなど猛禽類や草原に住む小鳥たちが見られるところです。

この干潟を太平洋の荒波から守るかのように砂州が延びています。ここが私たちの観察の拠点です。この鶴川には色々な伝説があるようです。この川のことをアイヌ語でムカッペといいます。ムカッペというのは、潮風のため砂で河口がふさがる川のことをいい、これがなまってムカワになったというのです。これが本当のようです。

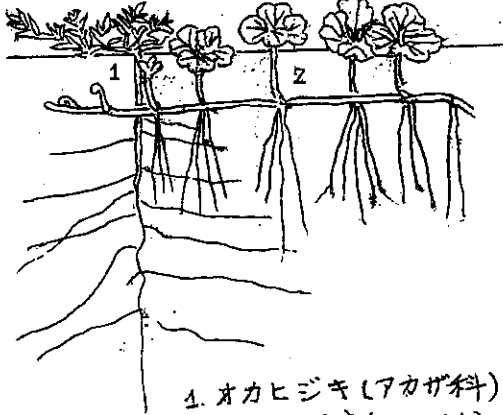
鶴川の流れは、初め海岸線に向かって、まっすぐ（直交）に流れていました。ところが、この流れが潮風によってできた砂州に妨げられ、極端に曲がってしまいました。これは、鶴川が上流から運んできた砂や礫（レキ）を太平洋の波が、河口から西の方へ運んだためできた現象といわれています。どおりで、砂州の上には色とりどりの礫が砂の中から顔を覗かせています。長い旅をして、長い時間をかけ、つるつるに磨かれた美肌を見せています。また、貝殻の破片も散らばっています。エゾウバガイ（ホッキガイ）、アサリガイ、ムラサキガイなども見られ、ツメタガイに上手に開けられた円い穴も見られました。砂州は、いつも強い潮風にさらされ、砂が飛ばされています。砂州の凹凸の形も絶えず変わります。砂州の植物にとり、砂の移動にどう対応して生きていくかが最大の問題になるでしょう。

砂の移動が激しい海に近い前面には、エゾノコウボウムギ、ハマニガナ、オカヒジキなど多肉質の一年生やシロヨモギなど多年生が生えています。

さらに、海岸線から離れた砂の移動が少し弱まったところでは、ハマニガナ、エゾオグルマ、ハマニンニク、エゾノコウボウムギなどが生えています。砂の移動が小さくなり、内陸側に進むとナミキソウ、ウンランなどの植物が分布しています。



砂の移動がほとんどない安定した所では、エゾフウロ、ナミキソウ、ノコギリソウ、ハマナスなどが見られます。こんなところにも藓類のホソウリゴケやエソスナゴケも生えていました。水分があるわけでもないのに、葉をいっぱい広げ、砂粒をしっかりとおさえて飛砂を防いでいます。大自然の中で、大きな役割を果たす、小さ植物のけなげさに感動せずにはいられませんでした。



1. オカヒジキ(アカガ科)
2. ハマニガナ(キク科)

植物の種類が内陸に向かって変わっていく様子から、砂州に適応した植物の形が見えてきました。海浜は植物にとり厳しい環境ですが、それだけに環境との関係から考えて見る面白い所だと思います。かつては「海浜は生態学の

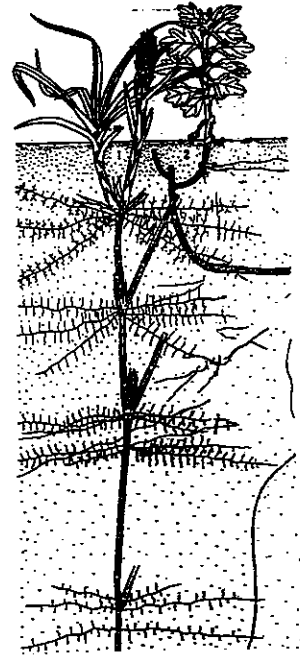
ふるさと」といわれた理由が分かりました。

しかし、近頃では、海浜の形も大きく変わり(自然的にも、人為的にも)、もともとの海岸線らしい形が日本の海岸から、めっきり少なくなっていくのが残念です。

楽しい雰囲気の中で過ごさせていただいた観察会でした。この観察会の運営にあたった役員の皆様、温かいご好意を寄せてくださいました地元の方々に感謝いたします。

来年は、時間の都合をつけて、例の花合わせや、地元の人々に参加を募る方法など検討してはいかがでしょうか。いつも見慣れているようで、見えていない風景があります。その中に面白い発見がきっとあることを願って――

1. エゾノコウボムギ:
(カヤツリ科)
2. シロヨモギ(キク科)



<ナガミチョウテンゴケ>一酔の物にして、グイーツー

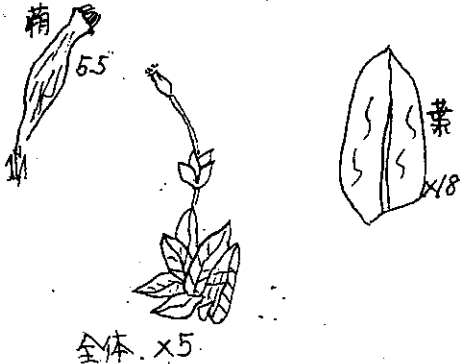
開拓記念塔の方から、ふれあいコースに向かって歩きます。途中、急な下りの坂道があります。雨上がりの日には、路面が滑ります。くれぐれも足元には気をつけましょう。ここで、私が見事(?)なストリートダンスを演じたのです。坂道の中程で、排水溝をまたぎ、溝のゴケを覗きこみ、体勢を坂道に戻したとき、右足を滑らせ、尻もちをつきました。そのお尻を回転軸にして360度回り腹這いになったの

です。ここは泥でメイクした顔を、ふれあい交流館の扇谷さんにお見せした思い出の場所になってしまいました。

坂道を降りて右側に曲がると右手に土止めをした石垣があります。この石垣の壁面に這いつくばうようにしたコケの群落があります。ルーペで覗くと薄く、柔らかそうな海藻に見えます。酢の物にすると酒の肴にいけそうです。それには、相当、かき集めなければなりません。食の適、不適については分かりません。

試して見る興味はまだ私には湧いて着ません。

このコケは、茎の長さが2—3 cmで、わずかに枝分れをしています。葉は茎の先に向かって左右についています。形は平べったく、卵形をしています。乾いても茎に接することはありません。中助は葉先近くまで伸びています。しわしわが波打って見られます。蒴は赤褐色をしています。湿った土手や木の根元にも生えています。



このコケは蘚類のヒモゴケ科のナガミチョウチンゴケ属です。日本産の一属三種の一です。

- *参考図書 『生態学からみた北海道』 北海道大学図書館刊行会
『勇払原野』 北海道新聞社
『鶴川町史』 鶴川町
『北方植物生態図鑑』 北海道生物教育会

□□ ボラ・レン喫茶室 □□

《ふしぎだと思ふこと》 <ノーベル物理学賞受賞者朝永振一郎さんの箴言から>
ふしぎだと思ふこと これが科学の芽です
よく観察してたしかめ そして考えること これが科学の茎です
そして最後になぞがとける これが科学の花です。

今年はノーベル物理学賞を3人の日本人が受賞しました。とても嬉しいことです。

<対称性の破れ>などは難しく理解できないのは残念なのですが。

彼らの先輩格である物理学者<朝永振一郎>さんが科学の探求のあり方を示した箴言を上に記載してみました。

ふしぎに思ふこと→それを観察し、よく考えること→そして解明へ。

私たちが自然を観察し研修するのも一面ではこの<科学の花>を見つける活動でもあります。今後は、これまで以上にこの<科学の花>を求めながら活動をしていきたいものです。(S)

小樽周辺登山道の案内標識板設置について

小樽市 大川良祐

ボラレン小樽支部の行事は登山観察会が多く、長年案内を続けてきた支部代表の北原武さんにとっては、小樽周辺の登山道案内標識（小樽市役所設置）が長い年月の風雪等の影響で壊れたものや方向が曲がったもの、表示が正確でないものがあることは、ずっと気になっていたようです。

3年ほど前に国有林を管理している北海道森林管理局石狩森林管理署赤井川森林事務所作製の立派な作業道標識を見て、同署に案内標識作製の相談を持ち込みました。この仕事の窓口は小樽野草愛好会（会長北原武氏）で、これを資金と対外折衝の基盤にしています。植生調査と登山道の草刈等をする小さなボランティア団体ではありますが、植生調査結果が小樽市博物館紀要別刷に記載されている実績が官公署の信頼を得るのに大きな役割を果たしたようです。

依頼していた木製標識の製作費は国有林整備への協力と認められたのか、しばらくして「無償」との連絡を受けたときにはさすがに嬉しかったそうです。これに力を得て下調べと距離の実測など準備を進めて行きます。標識板は9箇所20枚ほどでしたが、その後、市内の登山団体の意見などを聞いて、平成19年2月1日、赤井川森林事務所で標識板受領時には14箇所30枚にもなっていました。標識板のサイズは2～3文字で長さ45cm、4～5文字で長さ60cm、幅と厚さは共通で24cmと4cmのどっしりしたものです。

設置作業は小樽山岳連盟と手分けして実施していますが、これは常時山に入る人達に対する啓発活動でもあり、また今後の維持管理への期待が込められています。設置の仕方としては、立木に取り付けるものは釘を使ってはならないとの条件付で、適当な立ち木がない所では、予めコンクリートの土台と塩ビ管を埋め、それに標識板を取り付けた標柱（防腐抗丸太6本特注）を差し込む方法です。電気工事を手がけるボラレンの成田伸一さんには30kgもある重電機を現地まで担ぎ上げ、ボルトの物色から取り付けまで終始お世話になったそうです。北原さんは「初めてのことでゆえ、ずい分と手こずりましたが会員ほか多くの人々の協力を頂いたお陰で、まわりの景色にマッチした良いものが出来たと思っている。」と満足した様子です。

更にその後追加設置の要望があり、平成20年5月までに新たに5箇所9枚の設置をしています。山に入る人の安全や山を大切にする気持ちから発した事業で、その仕事ぶりに感銘を受けましたので取材して纏めてみました。小樽周辺の山道を歩く機会がありましたら是非ご覧いただきたいと思います。

スギナとツクシのこと

苦小牧市 谷口勇五郎

8月31日、鶴川での研修会の2日目に、初めて参加したら、挨拶もそこそこに、「これ、スギナとツクシじゃないのかい？」と出されたのが、スギナのようなものと、胞子囊穂（のうすい）を茎頂（茎の上）に付け茎が緑色で、枝のあるものと、ないものなどでした。緑色で胞子囊穂を付けたものに「これはスギナやツクシじゃないです。ツクシは緑色をしていません。イヌスギナというやつですよ。スギナの仲間には5種ぐらいあり、図鑑に出ているよ。」と答えると、Aさんは、学名がこうだから、このはかまは葉の変形で云々。（学名を言われると、もう、お手上げ）。Bさんは「ツクシには緑色の茎を持ち茎頂に胞子囊穂をつけるのもあるそうだよ。」と言われ、びっくり仰天。更に、Cさんは、シダの図鑑を持っているようなので、スギナについて解かり易く書いてくれないか、とのことでした。こういう会話は刺激になりとてもいいですね。実物を持って帰らなかったのが迂闊でした。「しだの図鑑」（保育社1986）トクサ属の検索表を略して示すと。葉は小形で鱗片状、茎は中空で関節あり。

a 茎の実質は薄く、中央孔は直径の4/5を占め、・・・ミズドクサやミズスギナ

a 茎の実質は厚く、中央孔は直径の3/5以下

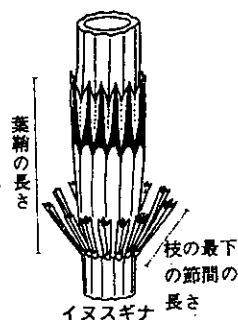
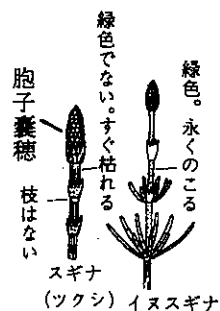
b 茎はふつう枝を出さない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・トクサ

b 茎は規則正しく枝を輪生する

c 下の枝の最下の節間はその枝のつく節の葉鞘よりも短い、・・・イヌスギナ

c 下の枝の最下の節間はその枝のつく節の葉鞘よりも長い、・・・スギナ

スギナは地上茎に2形あり、栄養茎がスギナで、胞子茎がツクシです。イヌスギナはスギナのように栄養茎と胞子茎の区別がなく、胞子囊穂は緑色の茎の上に付ける。トクサは常緑性でイヌスギナと同じように胞子囊穂は緑色の茎の上に付け、地上茎は2形ではありません。これが一般的なことですが、「図解植物観察事典」（地人書館・1984）P.324に、ツクシは夏ごろには、すでに翌春のものができており、この場合にスギナが刈り取られたりすると、翌春を待たずにツクシが生長し、下部がスギナになる。これをミモチスギナと呼ぶ、とあります。私の言ったのは一般的なことで、Bさんの言うのも正しいと言うことになります。その時、出されたものがどの種かは、それをよく見なくては判断できません。持って帰らなかったのが残念でした。



ペリパトス吉野川と四万十川

成 田 伸 一

春三月下旬、吉野川の大歩危、小歩危の景観を堪能していた。

四国三郎の異名のある吉野川は、わが国では流域面積は第 17 位に過ぎないのに、坂東太郎（坂東にある第一位の川の意、利根川）筑紫次郎（九州、筑紫平野を流れ有明海に注ぐ筑後川）についてあたかも日本で三番目に大きな川であるかの如く呼ばれますが、それは川が大きいというのではなく、荒れ川で、歴史時代に入ってから幾度となく洪水を引き起こし過酷な被害をもたらした川、四国三郎の名は、三番目に恐ろしい荒れ川だということなのです。今眼下の吉野川は、流速を速め、白波立て、夢中になって流れていくという感じです。四国山地を横切るこの辺は、地形に特徴があります。

川は元来、高いところから低いところに向かいます。四国の地形は北高南低で、太平洋側（南）瀬戸内海側（北）となっています。この辺りの吉野川は、高度が低い南から、四国山地に向かって流れ込むようになっていきます。この辺の流路標高は二百米以下（国土地理院 5 万分の 1）大歩危、小歩危の両岸の四国山地の標高は、千米もあります。

この地を流れる吉野川の上流、高知県大豊付近の山の高さは五百～六百米程度で上流の方が低くなっています。普通であれば川は反対方向、四国山地より南に向かって、つまり太平洋側に向かって流れ出さなければなりません。これは大変不思議な現象といえます。これは、四国島が海面に姿を現したとき、その表面に川が流れ始めたときには高知県側から今のように北に向かっていたと考えられています。

その後、四国島の中心部に四国山地ができ始め、行く手に山ができると流域面積の大きさとその包蔵水力の大きい荒れ川のこと、隆起量を上廻る浸食力をもって隆起する四国山地を浸食し続けた結果が今、目前に展望されています。山を横切って流れる川が吉野川なのです。この先の下流の池田で大きく右（東方向）に流路を変え四国山地に沿ってほぼ一直線に V 字峡で阿波の国徳島に至り扇状地を作り鳴門海峡に注いでいます。

池田での流路変更の状態は、現在は池田ダムが建設され残念なことに観察はできません。鳴門海峡には、淡路島がありますが、昔は阿波の国に至る路（みち）が現在の淡路島という地名になっています。

吉野川のその源流は、愛媛県にある石槌山（1982m）の南麓石槌スカイラインにある面河溪（おもごけい）の先、瓶ヶ森（かめがもり）にあります。両河溪から始まる石槌土小屋、瓶ヶ森には四国島のできた当時の地質がみられます。瓶ヶ森

（1897m）此処は吉野川源流で、石槌スカイライン～瓶ヶ森林道の駐車場は地質学上の三波川帯に含まれその北側は、阪神大震災で有名になった中央構造線が東西に

走行しています。中央構造線は西南日本のほぼ中央部を千キロ米以上にわたって縦走する大地質構造線ですが、これは単一の断層ではなく、これに接近したり、分岐したりする断層を伴い、時代によって活動様式や位置も異なり、それを総称して中央構造線断層系、その中で第四紀の活動部分を中央構造線活断層系としています。

三波川帯（三波川結晶変石類）と和泉層群の境をなす「地質境界としての中央構造線」は、四国中部から紀伊半島の北側を通りフッサマグナと並走、混合したりと中央アルプスの八ヶ岳に続いているとされ現在では、フッサマグナと分離し関東山地に延長していると推定されているようですが、地上部にその痕跡がみられない為、推定の域を脱していません。

地質関係では、外帯（がいたい）内帯（ないたい）の用語が使用されますが、これは大陸プレートより大陸側を内帯、太平洋側（海洋）を外帯と表現します。

四国島での中央構造線は内側、外側の境界線となっています。

（アジア大陸プレート上で）石榎スカイライン～瓶ヶ森林道では、岩石を始め、土小屋登山コースで石榎山は登り三時間で登頂でき、高山植物群も豊富な処です。

四万十川は、中央構造線の南、四国山地南端を形勢する不入山（いらずやま 1320 米）の 1200 米地点にその源流部を求めることができます。（不入山山群を形勢）

四万十川は地質上は四万十帯あるのですが、四国島の南側高知を中心に足摺岬と室戸岬を東西に一直線にラインを引いた太平洋に突き出た両三角形部分は、再び三波川帯となり足摺岬の最突出部は、白色の花崗岩の絶壁で太平洋に落込んでいました。

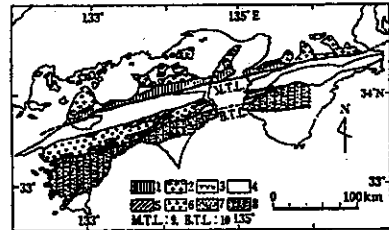
石灰岩は海水中のカルシウム等が化学的に結合したものと、海水中生物体等の動物、サンゴ虫や、放散虫、コノドントといったプランクトンやオキアミといった 2 ミリ～5 ミリ程度の大きさの微小生物体の死骸の沈殿物でできていて経年変化で堆積岩になります。

この生物の生きている場所、時代の相違により堆積岩のできた場所、時代が解明されます。

四万十川の源流は、吉野川の源流より南東に二十数キロと近距離にあり、吉野川は東方向に直線的に流れ、高知県大豊で北方向に流路を変え、徳島県池田で再び東方向に流れを直線的に流路を変え河口に至っています。

一方、四万十川とはいえば、源流より南方向に大きく蛇行しながら河口に至っています。四万十川の名前は、大きく蛇行している地形にあり、岩石の作った自然堤防と瀬と淀みが、河口から源流までの間に四万と十箇所あり、これが川の名称。

吉野川のV字溪、急流に比べ、四万十川はゆったりとした清流の感じで、この川



1: 和泉層群 2: 徳島花崗岩類 3: 東阿波花崗岩類 4: 三波川結晶片岩類 5: 四国新緑色地帯 6: 奥文系(中生界) 7: 奥文系(中生界) 8: 四万十層群(中生界) MTL: 中央構造線 BTL: 仏徳構造線
それぞれの地帯が東西方向に連続し伸びている点が特徴的である。

の特徴の一つにダムがないことです。源流から河口までの直線距離は短いのですが、四国島の縦方向に三分の二で196キロ米、吉野川の方は横で三分の二程度ですが192キロ米と四万十川の方が四キロ米程長くなっていて、蛇行と直線的との相違も面白い点でしょう。

四万十川の源流で野営の折に、周辺の石を観察し、三波川帯に近接しているので、三波川変成岩（黒色変成岩、緑色変成岩）も探してみました。色の似た藍色の蛇紋石がありこれはアスフェストの原料となった石で、アンチゴライト、クリソタイル、リザーダタイトの三種の総称が蛇紋岩です。先日実施された富良野研修会場の太陽の里の向い側の山裾に山部鉦山がありクリソタイルが掘られアスフェストの原料となっていました。

四万十帯の堆積岩に興味を懐いたのは、普通堆積岩はその生成過程で古い地層の上に新しい地層が堆積していなければならないのですが、四万十帯では古い地層が上にあり、新しい層が下層になっています。これも不思議です。何万年、何千年の経年変化の過程が逆転しています。これはプレートテクトニクス理論によって解明されました。

1940年頃より世界の地質学はテクトニクス理論に傾いていましたが、日本では1970年頃迄は地高説が主流でした。そのため四万十帯の堆積岩のナゾも解明されませんでした。テクトニクス理論によってそのナゾの部分が理論的に解明されたのです。

プレートが移動して大陸棚の下に入り込む時に移動途中海底にあった堆積岩を運んできました。このプレートの上にあった物質を付加体といいます。プレートが大陸の下に入り込む時大陸の縁に取り残され、また後から運ばれてきた新しい付加体はその下に入り込むの繰り返しで四万十帯のナゾは明らかになりました。

四国島という小さな地方の、源流部の近いのに、その流れ方の特徴が異なる二つの川に魅せられた春でした。九月頃にもう一度石槌山を狙っています。

猪師 勉氏を偲んで

札幌市手稲区にお住まいの当会員 猪師 勉氏がご逝去されましたのでお知らせ申し上げます。

猪師氏は、当会の監査として役員を長年お引き受けいただき、本会の発展に多大な貢献をされ、また多くの会員が観察会等でご指導をいただきました。

今年の2月、役員改選時期でもあり引き続き監査役をお願いすべく、お電話をさしあげたところ、入院されている旨のお話を伺いました。

春になり、奥様から猪師氏がお亡くなりになったご連絡を受けましたが、本当に残念でなりません。

毎年3月になるとボラレンの会計監査に足を運んでいただきました。そして、会の運営状況や会計の執行状況のチェックをしていただいていた。その後のボラレンの総会において監査報告と適切なアドバイスをしていただき、総会が円滑に進んでいたことは、ひとえに猪師氏の人柄によるものだったのです。総会後の懇親会においても、会を盛り上げていただき楽しい一時を過ごしたことが、昨日のように感じられます。

猪師氏は自然観察会の活動を自ら立ち上げていました。「自然体験塾」を主宰されていて、年間20回を超える活動を展開していました。植物観察会はもとより、野鳥観察会、秋にはキノコの観察会、また冬にはクラフトの講習会等々、一年を通じ活動を精力的に進めていました。このような活動の姿を私たちボランティアレンジャー協議会の会員たちは自主活動の手本として、今後の活動の指針としていくことが猪師氏の遺志を受け継ぐことだと考えています。

ここに生前本会の活動に積極的にかかわっていただきましたことに感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

平成20年10月7日

会長 田村 允 郁

人類の英知を結集して

-地球温暖化防止に向けた国際的な取組み-

七飯町 岡村 敏夫

☆ 科学と政治の両輪で推進されている温暖化防止策

2007年のノーベル平和賞が、①IPCC(気候変動に関する政府間パネル=温暖化の影響や対応策を研究・提言する国際組織)、②アル・ゴア前アメリカ副大統領(映画「不都合な真実」等を通じ、温暖化の知識普及に尽力)に授与されました。環境分野からの受賞は2004年(ケニアのワシントン・マータイ氏)以来2回目と報道されていました。

IPCCは後述するとして、ゴア氏の「不都合な真実」の映画については「エゾマツ」80号で田村会長が、著書については同83号で広報部がそれぞれ紹介していますので、ゴア氏の功績についてはそちらも参照してください。ゴア氏は受賞にあたっての記者会見で「二酸化炭素の削減は人類の文明の生き残りに不可欠だ」と訴えました。

ところで、地球温暖化の問題でよく耳にする「京都議定書」とは? それは先進国に温室効果ガスの削減を義務付けた国際的な温暖化対策の出発点と位置づけられている画期的な取り決めです。2012年に期限切れを迎えるこの議定書に続く「ポスト京都」を話し合う国際会議が2007年末にインドネシアのバリで開催されました。1年前のちょうど今頃、COP13の活字が新聞紙面を賑わしていたのを記憶されている方も多いのではないのでしょうか。

COPは国連気候変動枠組み条約締約国会議の略称で、1992年の地球サミットで合意し、そして94年の条約発効以後、毎年開催されている地球温暖化対策に関する国際会議です。97年に日本の京都で開催され上に述べた京都議定書を採択した会議が第3回(COP3)、そして京都議定書に代わる新たな枠組みを話し合う場のスタートとなったインドネシアのバリでの会議が第13回(COP13)ということになります。COP13でのラット・オーストラリア首相の発言「われわれは逃げて行くことのできる別の惑星はない。この地球しかないのだ。正しい選択をしよう」は正鵠を得た発言と思いませんか!

ノーベル平和賞が授与された気候変動に関する政府間パネル(IPCCの略称で呼ばれる)は世界気象機関と国連環境計画が1988年に設立した国際組織で130を超える国からおよそ4,000人の専門家が参加、これまで4回(1990、1992、1995、2001、2007年)にわたり評価報告書を発表してきました。同報告書は上に述べた国連気候変動枠組み条約の締約、COPでの京都議定書の採択等、地球温暖化に対する国際的な取り組みのトリガーになると共に科学的な根拠を与えるものとして極めて重要な役割を果たしてきました。第4次評価報告書発表時のパン・ギムン国連事務総長の発言「科学者たちは仕事をした。次は政治家の番だ」に象徴されるように、地球温暖化問題は政治(COP)と科学(IPCC)の両輪で推進されて来ていることが分かります。

そしてIPCC、ゴア氏に2007年のノーベル平和賞が授与されたことは国際社会への強いメッセージ性を感じることができます。「今後の地球温暖化は世界各地で深刻な紛争を引き起こし、安全保障上の脅威となる」とするEU(欧州連合)の欧州委員会の報告書が2008年3月、EU首脳会

議で採択されました。このように地球温暖化に代表される地球環境問題は世界の平和をも脅かす喫緊の問題でもあるのです。

☆ ポスト京都の行方

2008年7月に開催された北海道洞爺湖サミットの主要議題の一つとしてとりあげられたのがこの地球温暖化の問題です。最大の論点は地球温暖化対策の柱となる適応と緩和のうち、温室効果ガスの削減を中心に温暖化を食い止める「緩和」の方、具体的にはポスト京都に道筋をつける温室効果ガス削減の中・長期目標の設定でした。

先ず温室効果ガスの排出量を2050年までに世界全体で半減する長期目標は、「国連気候変動枠組み条約の全締約国と共有し、採択することを求める。」とし、50年に半減という具体的な目標は合意に至りませんでした。次に2020-30年の中期目標は、「国別総量目標を設定する。」にとどまり、こちらも具体的な数値は見送られました。IPCCはその報告書の中で(科学の面からは)2050年に50%削減するしかない、そのためには2020年の中期目標(25~40%の削減)が必要、今後、20~30年の排出削減努力が鍵を握る、と警告していました。



北海道洞爺湖サミットの
ロゴマーク

地球温暖化問題に関するサミットの成果について、重要な進展があったとするプラス評価も皆無ではありませんが、特に前進はなかったとするゼロもしくはマイナス評価の方が大勢を占めていたように思います。「立ちはだかる経済優位」、「米国への配慮がにじむ」といった見出しが散見されるなど、世界のCO₂の排出量の22%(第1位)を占める米国が足かせになっているとする論評もありました。

「G8(サミット)は、実質的には長期目標の設定を放棄し、削減交渉を締約国間に丸投げしただけ」(道新の社説)と酷評されたポスト京都の道筋、すなわち2013年以降の新たな枠組みを決める今後の議論・交渉は2008年12月に開催予定のCOP14(於ポーランド)、2009年のサミット、COP15(於デンマーク)に引き継がれていくことになりました。

地球温暖化は地球・人類みんなにふりかかり、生態系、農業、水、あらゆるものに影響を及ぼし、ひいては人類の生存そのものを危うくする可能性も否定できません。温暖化の影響は非常に長い期間続き、ブレーキを踏んでも自動車が直ぐには止まれないように温室効果ガスの排出を現時点で例えゼロにしても温暖化は直ぐには止まりません。手遅れになる前に予防的に手を打つ、このことが温暖化の問題解決に求められる唯一無二の選択肢と言っても言い過ぎではありません。

ポスト京都に向けて人類の英知を結集し、このかけがえのない素晴らしい惑星・地球を後世に残すことができるのか否か、人類は今まさにその存在意義、真価が厳しく問われる正念場を迎えようとしているのです。 (完)

主な参考文献

本稿では主に「北海道新聞」をはじめとする新聞報道を参考にし、一部を記事から引用させていただいたところも多々あります。しかしながら本稿の文責は筆者にあることを改めてお断りします。

< 日高より発信 > エンレイソウに想う

川村 桂介

平取町はエンレイソウの宝庫である。1951年にヒダカエンレイソウが発見され、一躍注目を浴びるようになった。そのヒダカエンレイソウが森林伐採やそれにかかわる林道造成等の自然開発により、また心無い植物愛好家やそれを売って商いとす人達の盗掘等もあったのだろう。かその数が段々と少なくなっている。以前は生活環境保全林でも多く生育していたようであるが、そこでは最近ほとんど見られなくなってきている。しかし、幸いにも川向の林道沿いの一部の林（カラマツが優占する二次林）の中で何箇所か固まって出るところが残っている。平取町ではヒダカエンレイソウの他にミヤマエンレイソウとオオバナノエンレイソウ、アオミノエンレイソウ、クロミノエンレイソウ、そしてシラオイエンレイソウが生育している。中でもシラオイエンレイソウは、あちこちの林の中で大きな群落を作っている。そんなことでエンレイソウの仲間、平取町を代表する花といってもいいかもしれない。

シラオイエンレイソウはオオバナノエンレイソウとミヤマエンレイソウとの交配種だといわれている。今云うところのハイブリッド (hybrid: 混ざりあつた、糺) の植物なのである。しかし、その本家本元というか生みの親であるオオバナノエンレイソウが、シラオイエンレイソウの回りには余り見当らないのである。ミヤマエンレイソウの方はエンレイソウ（アオミとクロミ）とともに幾らかは見られるのであるが、オオバナノエンレイソウはほんとうに少ないのである。シラオイエンレイソウが誕生するまでは、その辺りにはオオバナノエンレイソウとミヤマエンレイソウが沢山生えていたと考えるのが自然であろう。

シラオイエンレイソウが誕生したとしても、その回りにはもっともといっばい生えていてもいいはずなのである。ところが、回りにはさっぱり無いのである。このことは一体どう理解したらいいのだろう。まさか子供に遠慮して親は別なところに・・・ということではないだろう。

これは一代雑種の強みなのだろうか。種が混ざり合うことにより、たまたま親より強い繁殖力を備えたシラオイエンレイソウが誕生したのだろう。そして、生みの親であるオオバナノエンレイソウをじわじわと回りから追い払らい、そのあとを占有しながら大きな群落を作っていたのではないだろうか。

本当にそうだとすると、他のエンレイソウの仲間達もシラオイエンレイソウとの生存競争に負け、いつかは消えていってしまうのではないだろうか。はなはだ大げさな話ではあるがそう思うのである。

また、ヒダカエンレイソウもミヤマエンレイソウとエンレイソウとの交配種だとのことである。大型で赤い花卉を持ったきれいなエンレイソウである。前段でも述べたとおり、そのヒダカエンレイソウが、この平取町では数が段々少なくなってきたのである。その大きな原因はやはり自然開発によるものなのだろう。しかし森がいじられ攪乱されてから数十年はたち、林の中は現在静かで落ち着いて安定した状態にあることと思う。その上ヒダカエンレイソウの株がまだ幾らか残っているのだから、以前の状態までにとはいわないまでも幾分持ち直し増えてもいいはずである。しかしそのような様子はないように思えるのである。

一体全体、ヒダカエンレイソウ同士では繁殖能力は無く子孫を残すことはできないのだろうか。無いとしても、素人考えではミヤマエンレイソウとエンレイソウがある限り、自然交配によりまた新しいヒダカエンレイソウが生まれてきてもおかしくないと思うのである。

今年、別なところにもヒダカエンレイソウの出る林があるということまで連れて行ってもらった。そこもやはりカラマツ林で、林の中には笹のエゾミヤコザサがびっしり生い茂っていた。ヒダカエンレイソウの出た所はいつのことかは分からないが、間伐と下草刈りが施されていて開けたところであった。そこには、ヒダカエンレイソウの他にニリンソウやエゾエンゴサクなどいろいろな草や花が見られた。

その光景を見たとき、以前に聞いた話を思い出したのである。それはある中学校の裏山で笹を刈り取ったところ、次ぎの年に刈り取ったところからサクラソウの花があちこちに出てきたという話である。それは、笹の下で眠っていたサクラソウの種が、下草刈りをしたことにより目覚めたのではないだろうかとのことであった。

ここの様子とその話とが頭の中で重なり、ひょっとすると笹が侵入してはびこってきたことが、前述のサクラソウ同様ヒダカエンレイソウを少なくさせている原因の一つなのかもしれないと思ったのである。

自然の仕組みは、そんなに単純なことではないのかもしれない。しかし、笹が入り込み一面に生い茂ってくると、今までそこで育っていた植物の生育が妨げられるだろうことは十分に考えられることである。

「以前、ここらではヒダカエンレイソウの花が沢山見れたんだよ」と云われる辺りの下草を刈り取ったら、笹の侵入により生育が押さえられ土の下で種や根の状態で我慢を強いられていたヒダカエンレイソウやいろいろな草花たちが、ひょっとしたら甦ってくるのでないだろうか。

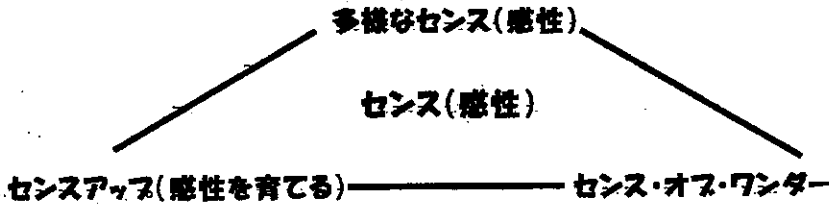
以上は 私のエンレイソウの仲間に対する妄想的な想いなのであるがヒダカエンレイソウももう少し勢いを取り戻し、あちこちにあの赤い花を咲かせてくれたらなあ・・・などと、ほんとうに思うのである。

いい案内人になりたい(4)

春日 順雄

このシリーズも4回目を迎えます。「いい案内人」を、知識・自然観・センス(感性)・案内の技術の4つを頂点とする正四面体で表し、関係的な把握を行ってまいりました。今回はセンス(感性)についてです。

4. センス(感性)



(1) 多様なセンス

感性は、「価値あるものに気づき、それを求めていく態度」です。「センスがいい」という言葉遣いをすることがあります。これは、音楽のセンス・絵画のセンス・色彩のセンス・写真のセンス・言葉のセンスなど、多様な領域につかわれます。ですから、センスは多様な相を持ちます。

(2) センスアップ(感性を育てる)

ある県のビジターセンターを訪れた時のことです。「公園内には豊かな自然が息づいています。これらの自然は、さまざまなことを語りかけてくれます。しかし、自然についての知識がなければ、私たちは、その一部分しか理解できません。」という、掲示板がありました。

私たちは、自然界の事物や現象の把握、日常の出来事や社会現象の把握は五感を働かせて行います。これを、感受性といいます。感受性は、生来、人間に備わっている能力です。前述の掲示は、感受性と知識が一緒になると、沢山の自然の語りかけを受け取ることができることを説いています。

自然観察会の駆け出しのころ、先輩の人たちの案内の様子から知識を得ると、今まで見えなかった植物の様子が見えるようになってきた。そんな喜びを実感しました。知識や体験が感受性を豊かにし、感受性が知識や体験を豊かにするということを実感したのであります。

一方、人間に生来備わっている感受性は、知識や体験とかかわりのない一面を持っています。美しいものに触れて感動したり、それに近づきたいという好奇心。理屈抜きに真実を見抜く直感力や洞察力。悲しいものに触れて涙する同情。気高いものへの憧憬。これらは、知識や体験の裏打ちなしの感受性であります。これらは、新しい知識や行動、体験を産む原動力になります。

センスアップ(感性を育てる)ステップは、次のように考えてみました。

第一ステップ 人間が本来持っている感受性を大切に

知識や体験の裏付けがなくてもいい、綺麗だ、素敵だ、嬉しい、悲しい、こっちは正し

いのでないかなど、あてずっぽうでもいい、鋭い直感力や洞察力は、本質を言い当て、行動の原動力にもなります。

第二ステップ 自分が持つ知識や体験と感受性の二人三脚

自分が持っている知識や体験を生かすと、自然の事柄がよくわかります。知識や体験が五感に働きかけ、感受性が鋭敏になったからです。鋭敏になった感受性が知識や体験を豊かにするということがあります。この様に、感受性と知識や体験の関係は不即不離の二人三脚です。

第三ステップ 他者の感受性や知識、体験に学ぶ（真似るは、まなぶです）

苦労して図鑑をもとに調べごとをする。でも、分からなかった。ところが、仲間に応援を求めたら、たちどころに解決したという体験を持っている人は多いでしょう。この様に、他者の感受性、知識や体験に学び、自分を高めていくことは有効なことです。

実際場面では、各ステップが混然一体として、不即不離の関係で機能するでしょう。この繰り返しが、感性を育てることになります。そして、感性の表れは多様であります。

(3) センス・オブ・ワンダー (The Sense of Wonder)

「神秘さや不思議さに目を見張る感性」

「沈黙の春」の著者、レイチェル・カーソンは、56歳の生涯を閉じましたが、「センス・オブ・ワンダー」という未完の原稿を残しました。死後、彼女の友人たちが原稿を整え一冊の本にして出版しました。

この書は、一貫して、人間に生来備わっている感受性重視の立場で書かれています。

<以下、引用>『子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれています。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に澄み切った洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。《中略》 私は、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知のものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識は、しっかりと身につきます。消化する能力がまだ備わっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切り開いてやることのほうがどんなに大切であるかわかりません。』そして、『生まれつき備わっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮に保ち続けるためには、私たちが住んでいる世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくともひとり、そばにいる必要があります。』とも、述べています。

私たちが自然の案内人として今日あるのは、自然の素晴らしさや神秘さ、美しさが導きの星であったことは確かなことです。これからも、私たちの感性を大切にすると同時に、観察会参加者の感受性を大切にしていきたいものです。参加者の喜びや感激に共感し、生かしてあげられる案内人でありたいものであります。

J8サミットとハネカクシ

苦小牧市 谷口勇五郎

7月2日、G8とその他7ヶ国の子供達（ジュニア；J）の39名を8班に分けて支笏湖畔で、2時間ほど、自然ガイドをすることになりました。私の割当てはドイツと南アフリカで、子供達は皆、英語で討論ができるという。

下見して、どんな草木が目立つか、日本や支笏湖周辺にあるもの、ドイツや南アと比べてみました。ガイドの要領と日英の生物名の対照表を通訳用に作りました。

私の担当は子供といっても高校生で、ドイツは5名（内男子1名）、南アは2名共女子、通訳は千歳の人でした。午後1時過ぎビジターセンター前を出発。エゾヤマザクラ（サクラは日本を代表する木ということで）の葉や赤くなった実を見せ、樹皮に触ってもらいました。坂を下りながら、がけのスズメを示すと、ヨーロッパのもの（イエスズメ）とは少し違うという。ササを示しながら「何だか分かるかい」と聞くと、オバマ氏に似たドイツ人はバンブー（竹）という。竹の仲間のササで、日本とその近くにしかないと説明。

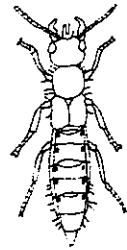
鉄橋を渡り、休暇村園地への坂を半分登った頃、2cmぐらいの長い虫が道端を動いており、ビンに入れて示すと「何？」、ハネカクシですが「甲虫」と口から出てしまいました。「刺すか？」に「この仲間は刺さないよ」と答えました。つい反射的に返事が出てしまい後で心配になってきました。

まもなく、「もうどれだけ登るのか？」。通訳に聞くと、疲れてもう限界だという。昨日、日本に着いて、時差もあり、午前中は開会式や歓迎の行事ですっかり疲れたのでしょう。園地に登り、ベンチで休みました。

その時、セイヨウオオマルハナバチを見せると「ホムビー」と口々に言いました。15年前から日本でトマトの受粉のため輸入したことを話し、ハウスから出て悪さをしているとは言えませんでした。通訳付きのガイドはもうないでしょう。握手して別れ、ほっとしました。

北海道は氷河時代に大陸の半島だった時期もあり、ドイツと共通した生物がいるものの、南アの子供達には見慣れぬ動植物ばかりで、しかも疲れの中、夢見心地だったでしょう。

ハネカクシ科は甲虫目で、日本に約1500種いるとのこと。前翅は非常に短く、大きな後翅はその下にたたまれ（羽隠し）、腹部は大部分が見え、自由に動かせるが、甲虫らしくない姿です。食性は多様で、活発に動き、飛べます。アオバアリガタハネカクシは、夜間灯火に集まり、腕に止まったのをつぶすと、ミミズ腫れになると言い、衛生害虫はこの仲間ぐらいのようです。



ハネカクシ
(約2倍)

平成20年度

北海道ボランティア・レンジャー協議会 第2回役員会

日時：平成20年9月24日(木) 18:30～

会場：札幌エルプラザ会議コーナー

参加：田村・五十嵐・佐藤・三崎・春日・小林・熊野・内山・佐藤敏・菅・村上・室野・高松

欠席：田中・橋場・伊藤・今村・中林

I、開会

II、会長挨拶

III、報告事項

1、総務部

- (1) 会員の動向 会員数132名 会費納入100名 未納者には請求をする
- (2) 「自然観察ハンドブック」の販売について
- (3) その他

2、研修部

- (1) 5月18日(日) 恵庭公園 一般5名・ボラレン8名
- (2) 5月25日(日) 三角山登山観察会 一般2名・ボラレン6名
- (3) 5月31・6月1日(土・日) アポイ岳研修 19名
- (4) 6月8日(日) 北広島レクの森観察会 一般10名・ボラレン8名
- (5) 6月15日(日) 森の新緑観察会 一般77名・ボラレン16名
- (6) 6月27・28日(金・土) 東大演習林研修 28名参加
- (7) 7月6日(日) 初夏の森観察会 一般20名・ボラレン13名
- (8) 7月20日(日) 芸術の森周辺観察会 一般9名・ボラレン13名
- (9) 8月7日(木) 夏の森の観察会 一般36名・ボラレン14名
- (10) 8月30・31日(土・日) 鶴川研修会 22名参加
- (11) 9月11日(木) 秋の花で賑わう森を歩こう 一般92名・ボラレン16名
- (12) その他

3、広報部

- (1) エゾマツ85号発行 6月23日発行
- (2) その他

4、事務局

- (1) 江別第二小学校3年生総合学習対応
日時：9月26日(金) 9時20分～12時
コース：大沢口→エゾユズリハコース→大沢コース→大沢口
ボランティア：我妻・室野・成田・吉田・高松・佐藤清一
- (2) 「さぼーとほっと基金」団体登録・助成について
・7/10 札幌市市民まちづくり活動促進基金団体登録決定通知書届く
・7/23 田村・三崎・春日 市民まちづくり局自治推進室市民活動促進担当課訪問
・その後、申し込みの公募があったが見送ることにした
- (3) 他機関との関わり
・行事の案内が多い。選択して、メーリングリストで配信

(4) PR活動

- ・主催事業の掲載依頼 道新
- ・えこぼろ掲載依頼

(5) 平成20年度ボランティア・レンジャー育成研修会について

- ① 自然ふれあい交流館との打ち合わせ 6/15・9/11
- ② 育成研修企画会議 8/26・9/4 委員長:小林 委員:五十嵐・内山・熊野

IV、議事

1, 総務部

2, 研修部 これからの観察会の当番を決めよう< 別紙資料による>

3, 広報部 次号「エソマツ」の発行について 10月24日印刷

4, 事務局

(1) メーリングリストの現状とこれから 現在22名の参加あり

(2) 北海道ボランティア・レンジャー協議会歴代役員 <別紙・沿革誌関連>

(3) 後期主催事業のPR

- ・ウォッチングガイド

- ・「自然観察会のご案内」 各50部 郵送とする。配布先は、次の通り

- 区民センター 中央・北・南・東・西・豊平・清田・手稲・厚別・白石

- 西岡公園水源地公園事務所

※手渡しは、自然ふれあい交流館・エルプラザ・大麻公民館

(4) 研修部の分掌について

- 研修部は、研修行事及び観察会に関することを企画し執行する

- ・観察会のしおりは、今年度は、事務局次長 佐藤敏幸が作成する。(予算措置:事務局)

- ・観察会下見時の植物あわせと記録化は、室野が中心

- ・野幌森林公園花暦 ボラレン編はできないか <例>「野幌の花暦200」

(5) 育成研修会について 了承事項として理解して戴く要素が多いが

- ① 育成研修会スケジュール 自然ふれあい交流館の資料による<別紙>

- ② 育成研修会 自然ふれあい交流館との打ち合わせ<別紙>

- ③ 会員加入の働きかけ

(6) その他

- ・忘年会について

V、閉会

平成20年度 観察会・研修会予定

月	行事名	実施月日	下見	集合・解散場所		備考	テーマ	当番
4	春の花を見 つけよう	24日(木) 10:00~12:30	17日(木)	交流館集合・解散	共催	昼食持参 自由	早春の花・ 野鳥観察	
	赤岩山と胎内巡 り	27日(日) 9:00~14:30		路線バスオタ モイ駐在所前 9時	小樽と札幌 と小樽博物 館の共催	昼食持参	札幌支部は 研修として 参加	
5	春のありがと う観察会	11日(日) 10:00~14:30	10日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食・ゴミ 袋・軍手持 参	ゴミ拾い・春 の花観察	
	恵庭公園観察 会	18日(日) 10:00~12:00	17日(土)	恵庭公園駐車 場集合・解散	主催	昼食持参 自由		小林・橋場
	三角山登山観 察会	25日(日) 10:00~14:00	24日(土)	緑花会館登山 口集合・解散	主催	昼食持参		菅・熊野
	アポイ岳研修	5月31日(土)~6 月1日(日)		アポイ岳調査 研究支援セン ター	研修	宿泊研修		小林・春日
6	北広島れくの森 観察会	8日(日) 10:00~12:30	7日(土)	れくの森入口 集合・解散	主催	昼食持参 自由		村上・佐藤・ 我妻
	森の新緑観察会	15日(日) 10:00~12:30	14日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参 自由	初夏の草花	小林・室野
	東大演習林研修	27日(金)・28日 (土)			主催	宿泊研修		小林・宮田
7	初夏の森観察会	6日(日) 10:00~12:30	5日(土)	交流館集合・解散	主催	昼食持参 自由		佐藤敏幸・ 春日
	芸術の森周辺 観察会	20日(日) 10:00~12:00	19日(土)	芸術の森停留 所前集合	主催	昼食持参 自由		今村・三崎
8	夏の森の観察会	7日(木) 10:15~12:30	7月31日 (木)	村集合・瑞穂 の池解散(時 計回り)	共催	昼食持参 自由	夏の花観 察・瑞穂の 池	室野・伊藤
	鶴川研修会	30・31(土・日)		鶴川四季の館	主催			小林・門村・ 荻野
9	秋の花で賑わ う森を歩こう	11日(木) 10:15~14:30	4日(木)	村発着・交流 館昼食休憩	共催	昼食持参	秋の花観察	菅・春日
	育成研修会	26日(金)~28日 (日)						
10	秋の森の匂 いをかごう	19日(日) 10:00~14:30	18日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参	紅葉・木の 実観察	春日 佐藤敏幸
11	晩秋の森観察 会志文別コース	3日(月) 10:00~14:30	2日(日)	交流館集合・解散	主催	昼食持参		村上・田村
	秋のありがと う観察会	9日(日) 10:00~12:30	8日(土)	交流館集合・解散	共催	ゴミ袋・軍 手持参	ゴミ拾い、木 の実・草の 実観察	高松・小林
	西岡水源地 自然観察会	23日(日) 10:00~12:30	22日(土)	管理事務所前 集合・解散	主催			今村・荻野
1	円山登山観 察会	18日(日) 10:00~12:30	17日(土)	円山登山口集 合・解散	主催			熊野・菅
2	冬の森の観 察会	15日(日) 10:00~12:30	14日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参・ 自由	野鳥・雪上 観察、交流 食事会	内山・小林
	藻岩山登山観 察会	22日(日) 10:00~14:30	21日(土)	慈恵会登山口 集合・解散	主催	昼食持参		三崎 佐藤敏幸
3	森の中で春 を探そう	22日(日) 10:00~12:30	21日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参・ 自由	芽吹き・野 鳥観察、交 流食事会	小林・室野

※東大演習林は、第一日目は、山部の太陽の丘周辺でフィールド研修、夜は演習林の宿泊棟へ。
二日目は演習林での研修。

※この計画案は、4月26日の総会の議決を経て正式のものになります。
年度初めの行事は、総会の議決後の周知作業では間に合いません。この通りになりますから、
会員の皆様は、この予定表に基づいて対応してください。
※アポイと東大演習林については、後日、研修部がハガキで参加のとりまとめをします。

平成20年度ボランティア・レンジャー育成研修会

広報部 内山恭子

今年も北海道立野幌森林公園自然ふれあい交流館主催、北海道ボランティア・レンジャー協議会共催で9月26日（金）～28日（日）にかけ、上記の育成研修会がおこなわれました。

1日目の開講式はボラレン会長、田村さんの挨拶から始まりました。アウトドアゲーム、江別消防署による救急法を参加者が学んでいる間にボラレンのメンバーは明日の野外実習の下見をしました。森の中は雨不足で萎れかかっていた散策路脇の植物も昨日の雨で立ち上がっていてホットしました。名残のユウゼンギク、マムシグサの赤い種子が季節を彩り、バッタが飛び跳ね、ヤマブドウ、ツタウルシの紅葉が始まっていました。

その後16時10分から「自然について ～種子にまつわる etc～」のテーマで研修部の小林さんが講義しました。

2日目は10時10分から野外実習としてボラレンによる自然観察会を行い活動の実際を参加者に体験してもらいました。4人ずつ4グループでしたので、きめ細かい観察会が出来たと思います。その反面伝えたいことが多すぎて、焦点がぼけたのが反省点になりましたがそれも参加者にとっては3日目のワークショップの反面教師になることでしょう。

13時から酪農学園大、村野紀雄教授の講義「野幌森林公園」がありました。カワヤツメの一生を知り、カワヤツメが棲みやすい川にすることで森を守ることに繋がり間接的に野幌の森が守られることが解り興味深いお話でした。

14時40分からは「プログラム作成と解説方法」で講義と実習がありボラレンが担当しました。実習では野外に出て“帰化植物” “冬芽について” “野幌森林公園の野鳥” “オオスズメバチについて”のテーマをそれぞれ10分間で解説しました。これは私たちにとり力量がためされる場で難しかったですが、逆にいい勉強になりました。その後参加者は室内に戻りワークショップのテーマ探して、ボラレンのアドバイスを受けながらもなかなか大変な作業の様子でした。暮かかった森へもう一度出てネタ探しのグループもありました。

17時40分～19時まではナイトウォッチングでした。参加者は夕方から約10℃に気温も下がっていたので寒かったと思います。

3日目は発表に向けて9時に集合してプログラムを作るグループやインターネットで前日遅くまで資料調べをしたり、朝早く起きネタの材料を採取したり各グループとも熱心にプログラム作りに取り組んでいました。午前中はワークシートを制作、タイトルは“植物

と虫の不思議な関係” “Touch-me-not!” ” ひつつき虫を探そう “ ” カツラ “ に決まりました。

午後からフィールドで発表です。リハーサルを何度もしたグループは持ち時間をピッタリ使いボラレン顔まけです。アイデアを取り入れたグループ、実際の経験談を話すことでより現実味のある発表あり、ヨモギにつく「虫こぶ」4種を見つけ専門家のような発表もあり、4グループとも個性的でした。人が集まれば集まるほど、それぞれ視点も異なりいろいろのプログラムが出来上がるものと感心しました。

15時から室内に戻り発表の振り返りを全員でおこないました。参加者の会話の中に達成感、満足感など充実した様子が感じられました。最後にまとめとして副会長の五十嵐さんが「北海道ボランティア・レンジャー協議会とボランティアを行うにあたって」と題して話されました。

16時から修了証書授与、アンケート記入、などで3日間の研修会は終了しました。参加者、関係者共々お疲れさまのことでした。とくに 交流館の皆様は無事終了されほっとされたことと存じます。またいろいろお世話になりました。有難うございました。

最後に総務部の三崎さんのボラレン加入のお誘いで10名の新しい仲間が加わりました。



3日間の受講を修了したメンバー16人

オホーツク支部秋季研修会 西興部村で開催

オホーツク支部 小栗 法韶

オホーツク支部の年中行事である秋季研修会を、西興部村教委が主催する「地域学講座」宮の森の植物第3回目の集まりに、一般参加することで実施しましたので、その内容を報告します。

研修日は9月13日(土)、15時30分集合。会員5名参加しました。西興部村在住の安部会員の案内による村内視察。

西興部村は公共施設が整備充実されておりこれらは黄色系に統一されて、施設名には夢と創の字が使われ、村の特異性と文化を表に出している。「小さくてもきらりと光る村」を元に国の進める町村合併外圧に屈せず自律の途を歩んでいる。

道の駅にしおこっぺ「花夢」と、苔の蒼みとさび、日本庭園興樂園、園内の茶室、エレキギター製造工場を見学した。

その後、市街地に接している宮の森森林公園内のログハウスで会食し植物のDVDを視聴し第一日目を終えた。

第2日目、午前9時講義「北海道の花(秋)」、講師、酪農学園大学伊吾田宏正氏、北海道大学加藤ゆき恵氏によって行われた。次に宮の森、森林公園に会場を移して野外観察が行なわれた。該地はキャンプ場、スキー場等があり段丘、林床、水生植物と変化に富んでいる。資料によりますと草本木本合わせて70種類以上の植物名があげられていた。

当日見られた主なものは次のとおり。

マムシグサ、ヒヨドリバナ、ヨブスマソウ、ツルリンドウ、ミヤマアキノキリンソウ、クルマバナ、エゾショウマ、モイワシヤジン、ネジバナ、ゲンノショウコ、イヌタデ、ツユクサ、エゾトリカブト、キツネフネ、ギンミズヒキ、ツリバナソウ、オオイタドリ、サラシナショウマ、タチキボウシ、ミツバ、ノブキ、ベルガモット(花夢の花園)、ここでも帰化植物、アメリカオオアザミ、オオハンゴウソウがみられた。

この講座に村民、スタッフを含めて30人参加、身近にあるものを学習することは大切な事だと思った。

平成20年9月～平成21年2月

自然観察会のご案内



平成20年9月～平成21年2月までに行われる観察会の日程です。
私たちと一緒に、移り変わる豊かな自然の営みを観察してみませんか。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

晩秋の森 観察会 志文別コース

日時：11月3日(月)文化の日 10:00～14:30(昼食持参)

集合場所：野幌森林公園 大沢口 自然ふれあい交流館

大沢口からエゾユズリハコース・四季美コース・志文別線を歩いて登満別口の「森林の家」で昼食をとり、中央線を通って戻ります。例年、この時期は紅葉が美しく、早いものは落葉しています。

落ち葉をサクサク踏みしめながら初冬の森を一緒に観察してみましょう。

およそ8キロの徒歩となります。



西岡水源地 自然観察会

日時：11月23日(日)勤労感謝の日 10:00～12:30

集合場所：西岡公園 管理事務所前

広葉樹はすっかり落葉して、初冬のたたずまい。林の中は見通しが良く、野鳥の観察がよくできます。

そろそろ水源地の水が凍り始め、気候によっては降雪があるかも知れません。

防寒の対策をしっかりとご参加ください。



円山登山 観察会

日時：1月18日(日) 10:00～12:30

集合場所：円山登山口 (北海道神宮・南側駐車場の南側、大師堂前)

円山は今でも大自然が残る市民憩いの森で、山頂まではだれでも登れる身近な登山コースです。

山頂から雪化粧した美しい札幌の町並みや樺戸連山・暑寒別岳が展望でき、登山道では野鳥やエゾリスなど、近くで観察することができます。登山道は踏み固まっていることが多く、雪道用の靴であれば登山可能です。簡易な滑り止めがあると便利です。注)

藻岩山登山 観察会

日時：2月22日(日) 10:00～14:30(昼食持参)

集合場所：慈恵会登山口 (中央区旭ヶ丘5丁目・慈恵会病院の横、観音寺の裏)

一年中登山者が絶えることのない藻岩山は、豊平川と共に市民に親しまれ、札幌市の象徴でもあります。

また自生する植物群落は国の天然記念物に指定され、身近な自然観察に適した山でもあります。

登山道には動物たちのフィールドサインもたくさんあり、見られる野鳥も多く、冬の樹木の観察もできます。

昼食は山頂の休憩室でとります。

登山靴に滑り止めを付けた方が、上り下りが楽にできます。注)



※ いずれの観察会も事前に申し込みの必要はございません。

※ 参加費は保険料として100円を徴収させていただきます。

※ 現地の自然情報やご不明点など、下記事務局までお問合せください。

注) 簡易滑り止めを数個用意しています。

貸出しご希望の方は、事前に事務局までお申し出ください。

自然観察NOW

野幌森林公園自然情報

2008.9.11 No.6

北海道ボランティア・レンジャー協議会

エゾノコンギク

— 筒状花と舌状花 —

秋の花、エゾノコンギクが咲きだしました。キク科の多年草でシオン属です。属の学名アステル (Aster) はギリシャ語の星を意味していて、放射状に開く頭花 (小花が多数ついて、あたかも一つの花のように見える花) の咲き様にちなんでいます。

ノコンギクの北方型の変種の意味で、ノコンギクは野にある紺菊の意味で花の色に基づくものです。

葉は互生し、長楕円形または卵形で両面に毛があってざらつき、縁にはまばらに鋸歯があります。

頭花の中心部は両性の筒状花 (管状花) で黄色、その周辺には雌性の淡紫色または淡青色の舌状花です。けれども、生育地や個体株によって、葉の形や花の色などに多少の変化があります。

シオン属には600を超える仲間があり、限られた地域や環境の違いによって多くの分化した亜種や変種が分布しています。エゾノコンギクはノコンギクの変種で、その他に関東、東海の浜辺のハマノコンギク、亜高山や高山に自生するミヤマコンギク、四国九州に分布し初夏に開花するハルノコンギク等があります。

園内でエゾノコンギクの仲間にはこのほかに、ユウゼンギク、ネバリノギクがあります。花の色、花びらの数、葉の形、葉が茎にどのように付いているか等々を調べてみましょう。



筒状花



はなびらが根元で融合し筒状になった部分を持つ花

舌状花



舌のように細長い形をしたはなびらを持つ花

観察会の予定

・「秋の森の匂いをかごう」観察会

10月19日(日) 10:00~14:30 ふれあい交流館集合 昼食持参

紅葉の季節は、樹木の葉の変化にともなう匂い、果実や種子の匂い、枯れた野草の匂い等々さまざまな匂いを発しています。それがいい匂いであったり、がっかりする匂いであったりはしますが、五感の一つ「嗅覚」を働かせてみましょう。

初秋あれこれ

9月の声を聞くと夏の気配も遠のいていきます。これは日本列島に暑さをもたらす暖かい太平洋高気圧がおとろえ、冷たい大陸の高気圧が張り出し始めるからです。夏から初秋に移るこの時期の森の変化を肌で感じてみましょう。

◆秋 空

太陽の光はいろいろな色の集まりです。それはプリズムを通して見ると、虹の7色にわかれることから証明されます。この太陽の光が大気にさし込むと、大気分子や大気中にある微粒子に当たって、光の一部が四方八方にはね返され散乱します。この散乱については「散乱する光の強さは、光の波長の四乗に反比例する」という性質があり、波長の短い青色の光が大気中で強く散乱を何回も繰り返し空を青くします。このとき大気中に水滴や細かい塵が多いと、青以外の光も散乱して、白っぽい青空になります。大陸からの乾燥した高気圧におおわれる秋は、大気中に水滴などの粒子が少なく、すっきりとした青空になるのです。

◆オオアワダチソウ

ふれあい交流館からふれあいコースに入ると、いちめんオオアワダチソウが花をつけています。北アメリカ原産の帰化植物で、もともと観賞用に導入されたとの説もありますが、急速に広がったのは第二次世界大戦後です。蜜源植物として優秀であるので、養蜂業者が積極的に種子を散布したとの説もあります。地下部分からアレロパシー物質を分泌することが知られています。

アレロパシーとは、他の植物の生長を抑える物質を放出したり、動物や微生物を防いだりあるいは引き寄せたりする効果の総称で邦訳では「他感作用」といいます。

◆アオバト

森林公園のエゾユズリハコースを歩いていると森の奥から「オーアーオー」との悲しげなアオバトの鳴き声が聞こえてきました。人が誰かを呼ぶようでもあったり、赤ん坊の泣き声のようでもあって独特の鳴き声です。

この鳥は北海道では夏鳥、本州以南では留鳥で、名前の通り全体的にオリーブ色ですが、オスは頭から胸にかけて黄色、腹はクリーム色、肩から羽が暗赤色、一方メスはそれらの箇所もオリーブ色です。広葉樹林や針広混交林を好み、単独か数羽程度の群れを作って行動します。

海水を飲むことが知られていますが、これは海水から塩分やミネラルを補給するためではないかと言われています。英名を Japanese Green Pigeon といいます。

地球環境用語

・フードマイレージ

フードマイレージとは、食料の (food)、輸送距離の (mileage) のことで、食べ物が運ばれてきた距離と、そのとき出る二酸化炭素を測って poco(ポコ) という単位にして、食べることで二酸化炭素の減ることのつながりをわかりやすくしました。

海外からくる食べ物は日本に届くまでにたくさんのエネルギーを使って運ばれてきますので、フードマイレージを知り意識して国産の食べ物を選ぶことで、自分の出す二酸化炭素を減らすことができます。

自分のため、地球のため、未来のために、国内で生産される食べ物を選びましょう。

ボラレン・メーリングリストに参加のお誘い

平成 20 年 10 月 15 日

事務局 佐藤 敏幸

会員相互の情報交換などを電子メールで運営できるよう、当会専用のメーリングリストを開設しております。自然情報の交換など、多くの皆さんの参加をお待ちしています。詳細は下記の通りです。

記

1. メーリングリストの概要

電子メールで宛先を【hbr-ml@freeml.com】に送信すると、登録会員すべてに共通で配信されるものです。(写真添付も可能)

2. 活用の例

・自然情報の交換 ・疑問質問&回答 ・知識の習得 ・全道会員の交流 等々

3. 参加方法

事務局ML担当「佐藤敏幸」の下記アドレスに「メーリングリスト参加希望」の件名で、ご自分の「お名前」と「メールアドレス」を送信してください。事務局でメーリングリストに登録すると、即・参加可能となります。

参加希望メール送信先→ dct-bin2@diana.dti.ne.jp

4. 携帯電話

携帯電話のメールでも参加可能です。上記同様に携帯から「参加希望」のメールを送信ください。ただし、添付される写真は機種によって削除されることが多いです。

5. その他

・配信メールの末尾にある「freemlの新規会員登録(無料)」は未登録でも使えます。登録すると共有写真閲覧やカレンダーでボラレンの予定閲覧、過去のメール検索などWEB感覚(ホームページ感覚)で閲覧可能です。

不明点など問合せ先

事務局・メーリングリスト担当 佐藤 敏幸

電話:011-895-8998 携帯:090-3116-5325

電子メール: dct-bin2@diana.dti.ne.jp

以上

“忘年会”のお知らせ

1、日時 12月6日(土) 6:00

2、場所 札幌市中央区北3条西2丁目 サツケン(札幌)ビル地下1階
*「ポレール」

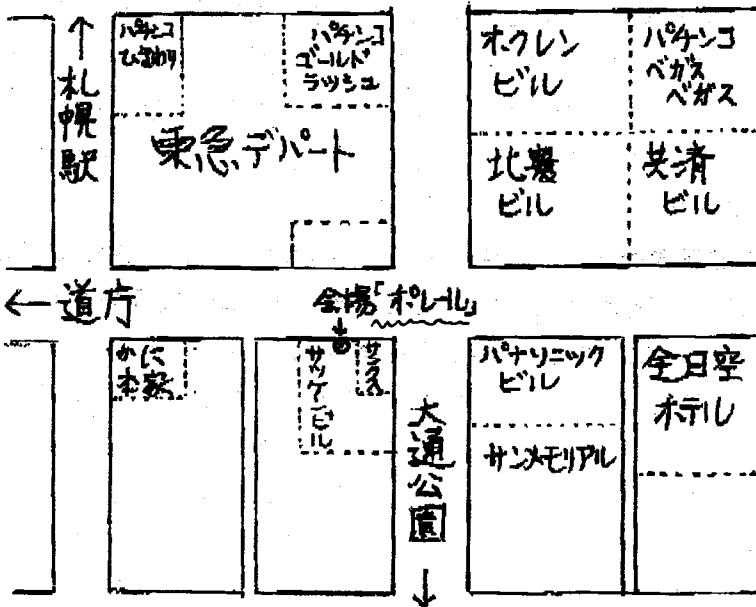
Tel 011-222-1970

3、会費 2,000円

4、申し込み 12月1日まで 三崎さんへ

Tel・FAX 011-772-0563

Eメール misakipiuka625@r4.dion.ne.jp



サミットは

- サ さあさあおいでよ洞爺湖に
- ミ 見通しもあまりなく集まってもらったが
- ツ 追求しえたのか 地球温暖化に対しての合意は
- ト とことん議論されたとは思えないが

岩手山(いわてさん) 2038. 2m

小林英世

この夏私が所属している山岳会の40周年記念山行の時の記録です。

盛岡市北西方にそびえるコニーデ式火山。南部富士・岩手富士・巖鷲山・南部富士など多くの愛称を持つ。東西二つの火山が複合した山体で、有史以来、数回の火山活動が記録され、現在でも続いている。岩手県の最高峰であり、孤高性が高く、山岳信仰の対象になっていた。中腹以上は高山植物帯となっており、山腹には温泉が多い。十和田八幡平国立公園、特別天然記念物「焼走り溶岩流」、国指定天然記念物「岩手山高山植物帯」。

東西二つの火山からなり、古い西岩手火山の上に新しい東岩手火山が覆っている。西岩手火山の火口は東西約3km、南北約2kmの紡錘形をなし、北側の屏風岳、南側の鬼ヶ城を外輪山とする大地獄カルデラと呼ばれている。その内部に中央火口丘としての御苗代火山と御釜火山などがある。東岩手火山は西岩手火山の東斜面に形成された新しい火山で、御鉢と呼ばれる火口をもつ薬師岳、その中央火口丘である妙高岳および二次火口の御室などからなる。御室火口東部には噴気孔があり、活火山の様相を呈している。享保17(1732)年1月の噴火では、東岩手火山の北東斜面中腹から多量の溶岩が流出し、「焼走り溶岩流」が形成された。

名前・別名の由来東斜面のみが美しく裾を引くことから「南部片富士」、残雪の模様がワシに見えることから「巖鷲(がんにゅう)山」など、様々な呼ばれ方、諸説がある。

信仰 御室と呼ばれる二次火口に岩手山神社奥宮があり、宇迦之御魂命(うかのみたまのみこと)、倭建命(やまとたけるのみこと)、大国主命(おおくにぬしのみこと)の三神が祭られている。一方、頂上には花崗岩からなる権現の頭、御鉢には63基の観音像が並び、どうやら神仏混淆の様式らしい。伝説によると、坂上田村麻呂が大同2(807)年に祭事を行ったという。江戸時代末期までは岩鷲権現といわれ、奥州最高の霊山であり、庶民の崇敬の山岳であった。山頂を御殿と呼び、その遙拝所に堂宇が構えられている。中世から近世にかけて山伏修業による祭事がなされていたが、明治時代以降、無格社になった。

噴火災害記録

1686年 3月 25?日-4月 噴火:降灰, ラハール(火山泥流)[11月まで山頂火口の噴気活動継続か?]

1732年 1月 21-27日 噴火:北東山腹, 溶岩流(焼走り溶岩)

1919年 7月 15日 水蒸気噴火(西岩手の大地獄谷):降灰, 新火口形成

1930年代中頃-1970年代初め 山頂火口からの噴気活動活発

(1939, 1959, 1967, 1972年, 特に活性化した時期あり)

1998年2月から 岩手山西側を中心として群発地震, 地殻変動観測.

1998年9月3日 岩手県内陸北部地震:地震断層出現, その後震源域縮小, 地震回数激減

1999年3月 噴気活動活発化(西岩手), 2003年には低下

岩手山の北東斜面に、1719年の岩手山の噴火により吹き出した熔岩が、山肌を流れるままに冷えて固まってできたものです。扇状に広がる黒い岩石帯は、長さ約3km、最大幅約1kmに及び、緑あふれる周囲とは全く別の荒涼とした風景が広がります。

付近には、この熔岩流を歩くことができる全長約1kmの観察路が整備され、熔岩流展望緑地に、宮沢賢治の「熔岩流」という詩碑が建っています。

さて前置きはこれくらいにして、本文に入ります。今から7年前家族旅行で東北を回ったときに立ち寄った、八幡平見返し坂から見た岩手山にこんな形で登る機会が訪れるとは思っていませんでした。登山口に立ち見上げた岩手山、すごい大きな山と言うのが第一印象でした。7月6日朝、天気薄曇。テントの中の暑さのせいか起床時間より皆早めに起きています。朝食の新妻二人が作る塩ラーメンを食べ、テント撤収、準備を整え出発しようとした時、若干1名車で移動し、他の場所から登ると思い込み、入念なる化粧をしている。皆の行動にきずき車から出て、いざ出発。

焼き走りコース入り口で入山カードに記入、連番になったかなり立派なカードだった。焼き走り熔岩流を左手に見て、樹林の平らな道を進む、こんなので高度が稼げるのだろうかと思いつつ進む、北海道と違いグランドカバーの笹が無い、その分色々な植物を楽しめると思いきや、種類がそれほど豊富でない。しかし、朝から暑い！しばらく平らな道が続くが徐々に高度が上がってくる。50分歩いて10分休みのペースで登るつもりでいたが、暑さのせいかなかなか思うように行かない。Bちゃん体調不良、スピード落とす。何組かのパーティと休息がまちまちなので抜きつ抜かれつの常態が続く。8時18分第2噴出口跡、噴出口とあるので大きな穴があるのかと思いつつ行くが穴が無い、火山礫の黒い盛り上がりだった。樹林帯を抜けると第1噴出口跡ここも火山礫の盛り上がり。コマクサが数株、この程度のコマクサかと思っていると、後で度肝を抜かされる。Bちゃん体調不良二日目に弱いと本人の弁。ここで休息し様子を見ながら行ける所まで行くとのことで、ここで別れる。

再び樹林帯、そこを抜けると一面のコマクサ、凄いの一言、コマクサ平が恥かしいくらいの多さ。火山礫の斜面の道をコマクサやハクサンチドリなどを眺めながら登る。さすが100名山人が多い。TKさん虫刺され悪化の為お手当て、火山礫の斜

面を登りきると通称ツルハシの分れ、このあたりが五合目。上坊登山口の分岐、この辺りから前と後ろで差が開いてくる。後で判った事ですが、メンバーの一人が足の小指を数日前強打したとの事、小林、T,K、Y,Kが先頭に行く。Yさんをサポートしながら、最後尾に日陰さんの順となる。ツルハシから平笠避難小屋までの登りが辛い、おまけに蒸して暑い。汗がダラダラ、脱水症状にならないようにマメに水分補給。クライミングハイなのか結構休まず登れる。T,Kさんのお兄さんのランニングハイの自分と体が別の存在だと感じる話、五感以外の感の話、M君のスキーの上達した人の足の下にムズムズを感じた人が行き着く先はスキーにのめり込み仕事を辞めてスキーに没頭する。などの話をしながら、苦しい急登を登る。時たま沢筋から上がってくる風が何とも気持ちが良い！雪が解けて間もない所があり、シラネアオイ、サンカヨウがまだ見られた。ツルハシから1時間やつの事で平笠避難小屋到着。なかなか立派な小屋、トイレもある。離れた皆を小屋の中で待つ。この時頭に巻いた手拭い2回目の絞り、凄い汗。Y,TさんTシャツを脱ぎ、小屋で乾す。

全員の到着を待ち、休息後頂上に向かう。小屋から見る岩手山、大袈裟な言い方かもしれないが、下から見たくらいに高さがあるように感じる。小屋から頂上まで小1時間との事、予定どおりに登れると確信し砂礫の斜面を登る。11時35分頂上、お鉢を回って頂上に来る人、馬返し等の登山口から登ってくる人で頂上は人人でした。おまけに色々な虫が飛んでいる。記念撮影の順番待ち。次から次へとカメラを渡され、撮影会。皆で岩手山万歳！で記念撮影。時々ガスが晴れてお鉢が見える。まだカンカン照りでなかったので何とか暑さをしのげた。しかし頂上、しばらく居ると寒い、すぐさま体温調整でシャツを着る。12時下山開始。20分で平笠避難小屋に着き、休憩後下山。ツルハシでBさんと合流。北海道のカラッとした気候の中を登っている我々にはかなりキツイものを感じた。ツルハシからまた砂礫の斜面を降る、コマクサを見ながら降ると心も和む、白花のコマクサを探すなかなか見つからない、行きに見つけた白花のハクサンチドリが眼に入る。第2噴出口を過ぎ、樹林帯に入り間もなく雷鳴と共に雨が降り出す。木の葉が雨を受けてくれるのでさほど気にならない。焼き走りの溶岩流を見られるポイントに来たので、コースからはずれ、見に行く。今までに見たことのない光景に地球の力強さを感じる。登山道に戻り、登山口を目差す。15時25分登山口着。全員の到着を待ち、昨日も入浴した焼き走りの湯に向かい、今日の汗を落とし、簡単な反省会をし、西根の道の駅にてお土産を買い、Bさんと別れ、一路八戸へ、八戸では折角東北に来たのだから、ちょっと東北を楽しもうと、八戸の街に繰り出しフェリーの時間までを有意義に過ごす。T,Kさん下調べの屋台村に行き、夕食兼宴会を楽しみ、フェリー埠頭に向かう。さすがサミット、ここでも検問、乗船し帰道。上陸後またもや検問、苦

編集後記

- ・表紙の「ゴゼンタチバナ」は宮田和恵さんがスケッチし、写真「東大演習林での研修」は佐藤敏幸さんが撮影したものです。みごとに活写されています。
- ・岡村敏夫さんの連載「地球温暖化」は今回で終わります。豊富なデータをもとに「地球温暖化」の実態、現状、将来予想、そして今後のあり方まで、広い範囲にわたって明晰に論じた貴重なレポートをいただきました。とても重要で緊急なテーマでもあるので、できれば今後また原稿をお願いしたいと考えています。
- ・今年の育成研修会は9月26日から3日間、<ふれあい交流館>で行われ16人が参加され、そのなかから10人が私たちの会に加入されました。とても嬉しいことです。広報部の内山さんがレポートしてくれているように実り多い研修会であったと思われまます。みんなで力をあわせて会を発展させていきたい。
- ・9月26日、江別第二小学校の3年生のみなさんに簡単なガイドしながら野幌森林公園を歩きました。子どもたちの発想がとても新鮮で、楽しい一日を過ごすことができました。
- ・速いもので「忘年会」の季節がやってきました。今年も案内のハガキを出しませんので、「エゾマツ」を見て確かめ、総務部長の三崎さんまで電話などで必ず連絡をお願いします。
- ・次回の発行は1月下旬を予定しています。1月15日まで、広報部、北広島の佐藤まで原稿をお願いします。多くの原稿をいただいて更に発信力を高めていきたい。皆さんの原稿を待っています。

エ えがたい自由の大地で
ゾ ぞくぞくするような研究成果がある
 んだよ
マ 学び究めつづけたドロ亀さんが
ツ つくりあげたんだよ「林分施業法」を

「エゾマツ」86号 秋季号
2008年10月24日 発行
会長 田村 允都